
土地分類基本調査

とき
常

わ
葉

5万分の1

国 土 調 査

福 島 県

1995

序 文

福島県は、東京から300km圏内にあって、全国有数の広大な県土を有し、大きく発展する可能性を秘めております。

また、21世紀を目前にして「ふくしま新世紀プラン」を策定し、良好な自然環境の保全を図りながら快適な郷土づくりを目指しています。

このような観点から、本県では昭和46年度より国土調査法に基づき、縮尺5万分の1の地形図を基図とする都道府県土地分類基本調査を実施しており、これまでに28図幅を完了しております。

本調査は、土地の自然条件と利用状況に関して、その図幅単位に「地形」「表層地質」「土壌」「土地利用現況」等を地図と簿冊にまとめるものです。

今回は、阿武隈地域の中央部「常葉」図幅についてその成果を取りまとめたものであり、この調査結果が現在当該地域内において進められている地域開発、保全及び土地利用の高度化等、各種計画の基礎資料として関係各位に広く利用されることを期待いたします。

おわりに、本調査の実施にあたり御指導、御助言をいただきました国土庁土地局国土調査課はじめ、関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成7年3月

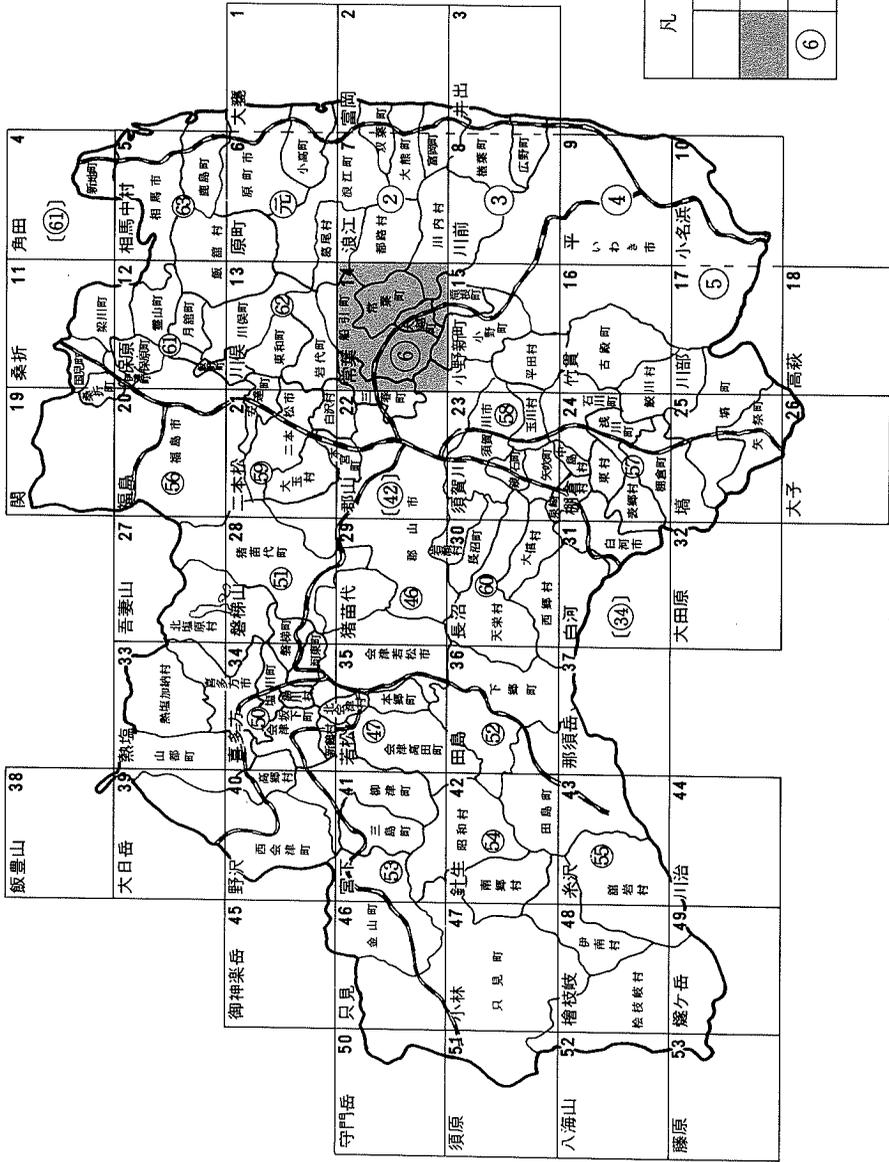
福島県農林水産部長

黒 澤 清

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第2条第1項第2号に規定する都道府県土地分類基本調査であり、関係する各作業規程準則（総理府令）に基づいて作成した「福島県土地分類基本調査作業規程」により、福島県が実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項4の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により建設大臣の刊行した5万分の1の地形図を使用した。
4. 調査の実施、成果の作成機関及び担当者は下記のとおりである。

調	地形調査		
	地形分類	福島大学教育学部教授	中村嘉男
査	傾斜区分	福島市立三河台小学校教諭	高橋正之
	表層地質調査	福島大学教育学部教授	中村嘉男
担	土壌調査	元福島北高等学校教諭	吉田義
		福島大学教育学部教授	真鍋健一
当	農地土壌	福島県農業試験場主任専門研究員	菅野義忠
		専門研究員	吉田衛史
	林地土壌	副主任研究員	三浦吉則
		研究員	田口明広
	関連調査	福島県林業試験場主任研究員	今井辰雄
		研究員	高原尚人
事	務	奥羽大学文学部教授	大澤貞一郎
		現況調査	
担	当	福島県農林水産部農地計画課	
		主任主査兼国土調査係長	上野隆司
		主 査	鈴木修治

本県の都道府県土地分類基本調査実施状況及び位置図



凡例	
	調査済
	今回調査
⑥	調査年度

目 次

総 論	
Ⅰ 位置及び行政区域	1
Ⅱ 人 口	3
Ⅲ 地域の特性	5
1. 自然的条件	5
〔地形的環境〕	5
〔気候的環境〕	5
〔表層地質〕	8
2. 社会・経済的条件	9
Ⅳ 主要産業の概要	11
各 論	
Ⅰ 地形調査	21
1. 地形分類	21
2. 傾斜区分	29
Ⅱ 表層地質調査	32
Ⅲ 土 壤 調 査	44
1. 農地土壌	44
2. 林地土壌	54
Ⅳ 土地利用現況調査	64
成 果 図	
Ⅰ 地形分類図	
Ⅱ 傾斜区分図	
Ⅲ 表層地質図	
Ⅳ 土 壤 図	
Ⅴ 土地利用現況図	

福島県土地分類基本調査：常葉

総論

I 位置及び行政区域

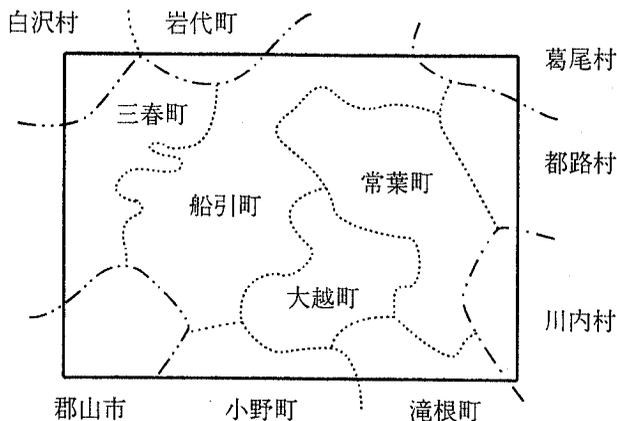
1. 位 置

「常葉」図幅の区域は、福島県の中通り地方東側、阿武隈高地中央部に位置し、経緯度では東経 $139^{\circ}30'$ ～ $139^{\circ}45'$ 、北緯 $37^{\circ}30'$ ～ $37^{\circ}40'$ の範囲にあり、図幅内の面積は 409km^2 である。

2. 行政区域

この図幅内は、大越町・常葉町の全部と船引町の大部分で6割を占め、郡山市・三春町・小野町・滝根町・都路村・川内村の一部と白沢村・岩代町・葛尾村の極僅かの面積が含まれる。即ち1市と3郡に属する7町4村からなる。

第1図 図幅内の行政区域



また、市町村別総面積と本図幅内に占める割合は第1表のとおりである。

第1表 図幅内市町村別面積表

(単位：km²，%)

市町村名	区分	市町村 全体面積 (A)	図幅内面積		占有率 (B/A)	備考
			(B)	構成率		
福島県全体		13,781.62				
調 査 地 域	郡山市	731.05	24.85	6.1	3.4	
	白沢村	48.40	2.69	0.7	5.6	
	岩代町	98.37	0.40	0	0.3	
	三春町	72.76	33.99	8.3	46.7	
	小野町	125.11	13.98	3.4	11.2	
	滝根町	50.70	17.23	4.2	34.0	
	大越町	36.66	36.66	9.0	100	
	都路村	125.37	31.91	7.8	25.5	
	常葉町	84.41	84.41	20.6	100	
	船引町	161.16	135.03	33.0	83.8	
	川内村	197.38	23.46	5.7	11.9	
	葛尾村	84.23	4.39	1.1	5.2	
	計		1,815.60	409.00	100	

(注¹) 総面積は福島県勢要覧(平成6年度版)による。

(注²) 図幅内面積は、プラニメータによる計測値である。

Ⅱ 人 口

福島県全体の人口の推移をみると、昭和55年に2,035千人台だったものが、平成元年には初めて2,100千人に達し、平成7年3月では2,132,591人となり、その後も微増している。

このような本県状況の中で、調査地域の各市町村の傾向を見ると、郡山市の増加率が県平均を大きく上まわる反面、その周辺市町村では減少する傾向が見られ、その割合も近年は小さくなる傾向を示している。

また、人口が減少している市町村であっても世帯数は増加しており、全体として核家族化が進んでいると見ることができる。

本地域の人口及び世帯数の推移は第2表のとおりである。

(福島県統計調査課 福島県の人口から作成)

第2表 人口及び世帯数

(単位：人，戸，%)

市町村名	昭和55年		昭和60年		平成5年		人口増加率(%)		人口密度	備考
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	5年/55年	5年/60年		
福島県全体	2,035,272	550,442	2,080,304	574,968	2,123,678	636,616	4.3	2.1	154.1	
郡山市	286,451	85,116	301,673	91,658	322,255	106,453	12.5	6.8	440.8	
白沢村	8,562	1,683	8,654	1,698	8,917	1,786	4.1	3.0	184.2	
岩代町	11,143	2,381	10,966	2,353	10,435	2,323	△6.4	△4.8	106.1	
三春町	19,047	4,595	18,987	4,734	19,773	5,265	3.6	4.1	271.8	
小野町	14,085	3,380	13,854	3,438	13,293	3,490	△5.6	△4.0	106.3	
滝根町	5,621	1,298	5,638	1,315	5,561	1,343	△1.1	△1.4	109.7	
大越町	6,847	1,530	6,639	1,521	6,216	1,496	△9.2	△6.4	169.6	
都路村	3,912	908	3,777	898	3,515	953	△10.1	△6.9	28.0	
常葉町	7,463	1,663	7,241	1,666	7,026	1,685	△5.9	△3.1	83.2	
船引町	25,089	5,656	24,762	5,757	24,104	5,878	△4.1	△2.7	149.6	
川内村	4,132	1,020	4,020	1,014	3,811	1,028	△8.4	△5.5	19.3	
葛尾村	1,992	489	2,012	470	1,812	461	△9.0	△11.0	21.5	
計	394,344	109,719	408,223	116,522	426,718	132,161	8.2	4.5	235.0	

(注) 福島県勢要覧(平成6年版)より作成。

Ⅲ 地域 の 特 性

1. 自 然 的 条 件

【地形的環境】

阿武隈高地（以下、支障のない限り従来用いられてきた阿武隈山地の名称を使う）を、太平洋側と阿武隈川縦谷側の両流域に分ける分水界が本図葉域東半部を南北に走るが、それを中心とする阿武隈山地主要部と、同山地西縁に連なる丘陵地との二つの地形地域が本図葉域を構成する。山地・丘陵地が全域を覆う関係で平坦地は主要河谷沿いに細長く形成されるに過ぎないが、他方、樹板状に細やかに発達した無数の支谷群沿いには、面積的には狭小ながら谷底平野・下位段丘面等が丘陵地のすみずみまで緩傾斜地を提供している。阿武隈山地の高原状の地貌を生み出す陸起準平原の諸要素—残丘、定高性山稜、小起伏緩斜面群—の卓越する東半部と、さざ波の限りない波頭を思わせる丘陵背面の連なりとなだらかな丘陵斜面に覆いつくされた西半部との絶妙な対照が図葉域の地形特性といえる。

【気候的環境】

船引観測所（船引町船引字新沼70、県たばこ試験場、標高460m）の1976年以降のデータ（第3表）によれば、阿武隈山地内の標高の高い小盆地に特有な気候特性のいくつかが示されている。たとえば、年平均気温 10.1°C は、小野新町（433m、 10.1°C ）、川内（410m、 10.0°C ）とほぼ同じ、郡山（230m、 11.5°C ）より若干低い程度に過ぎないが、日最高気温 $\geq 30^{\circ}\text{C}$ （9.2日）をみると郡山20.2日、小野新町13.3日、川内10.2日で後二者よりも少ないことがわかる。日最高気温 $< 0.0^{\circ}\text{C}$ （17.9日）は、郡山8.3日はもちろん、小野新町13.7日、川内11.7日より多いから、冬季の厳しい寒さが推定される。降水量は本県中通り地方に共通して1,100mm台と比較的少ないが、日降水量 $\geq 70\text{mm}$ （0.8

日)も他観測点の値よりかなり小さい。著しい特徴は暴風日数の少ないことで、日最大風速 $\geq 10\text{m}$ (1.5日)は郡山5.5日、福島12.0日と比べれば明らかである。総じてやや冷涼でおだやかな気候的環境にあるといえよう。

第3表 気象象表

船引観測所

(船引町船引字新沼70, 県たばこ試験場)

要素	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年	
気温 (°C)	平均	-1.4	-1.1	2.1	8.4	13.7	20.3	22.3	17.9	11.8	6.5	1.8	10.1	
	最高	2.3	2.5	6.4	13.7	19.0	24.4	27.0	22.0	16.6	11.1	5.8	14.4	
	最低	-5.4	-4.9	-2.2	2.9	8.1	13.2	16.9	18.7	14.2	7.1	1.9	-2.2	5.8
降水量 (mm)	25.5	57.2	75.3	96.9	103.2	100.7	158.5	129.1	154.8	107.2	63.5	33.2	1,139.6	
風速 (m/s)	2.3	2.3	2.3	2.4	2.1	1.6	1.5	1.5	1.4	1.5	1.9	2.2	1.9	
	日平均<0.0	21.9	8.8	8.3	0.3						0.6	8.6	54.4	
	日最高<0.0	9.0	6.9	0.5								1.5	17.9	
	日最低<0.0	29.0	25.8	24.0	7.3			1.3	3.2	0.3	1.0	10.8	23.8	119.7
	日平均≥25.0							14.9	22.9	6.5	0.2			4.8
	日最高≥25.0				0.3	2.8	6.8							54.5
	日最低≥25.0													
日最高≥30.0						0.3	2.8	5.8	0.3				9.2	
	≥1	5.8	7.3	9.8	10.6	9.5	12.8	9.7	12.9	10.2	7.3	4.4	113.4	
	≥10	0.7	2.1	2.8	3.7	3.6	3.5	3.5	4.9	3.3	2.1	1.0	37.9	
	≥30		0.3	0.3	0.5	0.7	0.7	1.6	1.3	1.3	0.2	0.1	8.6	
	≥50				0.2	0.3	0.2	0.2	0.6	0.5	0.3		0.1	2.5
≥70							0.2	0.3	0.2			0.1	0.8	
≥100														
日最大風速 (m/s)	≥10	0.1		0.5	0.4			0.2				0.2	1.5	
	≥15													
	≥29													

(日本気象協会福島支部(1995):『福島島の気候百年誌』による。)

【表層地質】

本図葉は、阿武隈高地のほぼ中央部にあたり、阿武隈高地の主峯大滝根山を含む、その西側の地域にあたる。

図葉のほぼ全域にわたって、広く花崗岩質岩石が分布する。それらは、岩相のうえから4つに区別することができる。

図葉内の地域には、大滝根山をはじめ、残丘状にそびえるいくつかの山体が発達するが、その山頂部は、斑粉岩質岩石で構成されている例が多い。

図葉北西部のごくせまい範囲には、火山岩の岩脈が分布する。また、西部地域の一部には、火山碎屑性の堆積物の分布もみられる。

図葉東南部の仙台平周辺一帯には、先白亜系の固結堆積物からなる。滝根層群が発達している。その延長の一部とみられる堆積物は、北方および北西方向に点在し、図葉北部を東西に流れる。大滝根川の沿岸まで分布する。いずれも、花崗岩質岩石の貫入を受け、接触変成作用をこうむっている。

図葉内の各地に発達する谷底低地には、完新世の時期の未固結堆積物が、各所に発達するほか、更新世の時期の未固結堆積物が、その下位や、または、段丘を形成して分布している。とくに、図葉のほぼ中央部を流れる、牧野川の中～上流部、および、堀越川ぞいでは、地域により、かなりの厚層に発達している。

残丘状にそびえる山体の山麓部には、崩壊性の未固結堆積物が、緩斜面地形を形成して、各所に分布する。

本図葉北西部にはNNE～SSW方向の断層が花崗岩質岩石内に認められるほか、図葉東南部に分布する滝根層群は、E～W性、および、NE～SW性などの断層で、一部断たれている。

本図葉の範囲内には、金属資源の発達はめばしいものはない。非金属資源としては、県内では最大の石灰岩体が発達するほか、図葉西部の花崗岩質岩石中には、ペグマタイト鉱床が発達し、珪長石を産する。また、図葉内に発達する未固結堆積物中には、その基盤となる花崗岩質岩石の風化部を含めて、地下水の帯水層となっている。

2. 社会・経済的条件

本図幅は、福島県の中央部、阿武隈山系の山間丘陵地にあつて、中通り地方に属する地域と浜通り地方に属する地域とがある。中通り地方は更に県北と県中に分かれるが、本図幅は大部分が県中に属し、わずかに県北（白沢村、岩代町）と、少しの浜通り地方（川内村、葛尾村）とで構成されており、各市町村の生活経済圏は浜通り地方・県北を除いた大部分が郡山市を中心としている。

交通網のうち鉄道は、J R 東日本(株)の郡山駅を起点とし、本図幅西辺中央より入つて緩やかに斜走しながら南辺中央を出たのちに浜通り南端にある県内最大の都市いわき市いわき駅（平成6年12月に、「平」駅から改称）まで結ぶ磐越東線が一条あるのみである。

また、これと平行するように新潟市といわき市を結ぶ磐越自動車道が計画され、郡山～会津坂下間はずでに供用を開始、郡山～いわき間についても平成7年度秋には開通できるよう工事が行われている状況にある。

図幅内では1カ所、三春船引インターチェンジが予定されており、途中東北自動車道の郡山ジャンクションを経由して首都圏との距離は大幅に短縮される見込みである。

主要な道路では、国道288号線が東西に、国道349号線が南北にそれぞれ図幅を四分するように走っている。

また、本図幅より南西方向の須賀川市及び玉川村には福島空港が平成5年3月に開設され、これらとアクセスするトライアングルハイウェイにも着手し、平成12年度には一部開通の予定である。

これら高速交通網の順調な整備が見込まれることなどから、関係市町村は企業誘致に努力し、徐々にその効果をあげている。

その他の道路では、主要地方道が316kmと一般県道が398kmあつて、市町村道・農道も含めてそれぞれ整備が行われている。なお、道路の整備状況は第4表のとおりである。

第4表 道路整備状況

(単位：km, %)

区分	国				道				県				道				市町村道			
	直轄		管轄		県管理		主要地方		一		般		市町村道		市町村道		市町村道			
	実延長	改良済	実舗装	実延長	改良済	実舗装	実延長	改良済	実舗装	実延長	改良済	実舗装	実延長	改良済	実舗装	実延長	改良済	実舗装		
市町村名	468.2	100.0	100.0	1,261.9	79.0	95.7	1,527.0	79.5	94.6	2,513.2	61.0	91.0	31,134.1	42.8	48.9					
福島県全体	77.0	100.0	100.0	22.6	84.8	90.7	133.5	93.7	98.2	180.9	71.5	93.6	3,510.5	39.4	47.4					
郡山市							9.6	48.4	97.4	28.5	66.0	82.7	558.3	30.3	23.1					
白沢村																				
岩代町				5.9	89.1	90.2	29.9	86.0	98.9	7.4	71.0	96.4	527.2	39.9	31.9					
三春町				10.2	100.0	100.0	31.1	64.2	90.2	21.5	65.1	94.7	294.0	63.1	77.7					
小野町				17.3	100.0	100.0	20.0	95.5	100.0	29.7	81.0	97.6	204.1	55.8	57.6					
滝根町							17.7	87.3	98.5	12.1	27.9	80.3	174.9	28.5	50.4					
大越町				3.0	98.6	98.3	8.2	90.9	100.0	11.4	51.9	96.5	107.8	39.0	44.9					
都路村				27.7	84.3	95.9				7.9	0	74.0	71.2	58.7	46.8					
常葉町				10.4	100.0	100.0				38.1	56.7	91.5	111.1	42.6	71.2					
船引町				25.1	93.8	100.0	31.0	61.7	99.7	27.4	39.2	91.3	576.4	15.9	48.4					
川内村				17.5	74.2	99.0	17.6	80.8	100.0	20.5	34.0	70.8	123.7	27.7	38.3					
葛尾村				7.7	30.6	94.7	17.8	70.6	100.0	12.1	9.5	89.4	77.1	47.9	46.0					
計	77.0	100.0	100.0	147.4	86.5	97.0	316.4	83.2	98.0	397.5	62.7	91.4	6,336.3	38.0	46.1					

(注¹) 国道・県道は「国道現況調査(平成4年4月1日現在)」により、市町村道は「福島県勢要覧(1994)」から作成

(注²) 延長は市町村内延長であり図幅内には限定しない。

IV 主要産業の概要

最近10カ年間に於ける産業別就業者数の動向（第5表参照）を見ると、県全体では4%の増加があるのに対して人口の伸びは3.1%に止まっている。この差は、年少人口（0～14才）の減少が主な要因であり、高齢化社会の一端を見ることができる。

一方、調査地域においては7.4%の増加で、県平均を大きく上回るものの郡山市の増加（12.1%）が著しいため、郡山市を除くとむしろ3.7%の減少であり、就業者が都市部へ集中する傾向を見ることができる。

産業別構成では、いずれの市町村においても第1次産業が大幅に減少し、第2次・第3次産業への移行が伺われる。

1. 農 林 業

(1) 農 業

本県の農業は、農用地の減少、労働力の流失、高齢化、生産環境の悪化が余儀なくされている。

昭和59年から10年間の推移を見ると、総世帯数では567,780戸に対して12%の伸びであるのに比べ、農家戸数では146,238戸に対して11.3%も減少し、農家人口もまた789,892人に対して21.7%もの大幅な減少となり、労働力の流失傾向を見てとれる。（第6表参照）

耕地面積では、県全体及び調査地域とも－9%台で同様の傾向であるが、郡山市の減少率8.4%に対してその他の地域が11.1%も減少するなど、都市部周辺地域での減少が特徴となっている。

また、農業粗生産額では平年3,500億円程度を堅持していたものが、平成5年度は2,980億円（福島県農林水産統計年報）と大幅に減少した。これは、この夏、東北地方が戦後最大級の冷害に見まわれたため、本県の作況指数は61、10a当りの収穫量は313kgに止まった。結局、全国で2,545

千トンものの外国輸入米に頼らざるを得なかった。(第7表参照)

本調査地域は、阿武隈山系の中にあつて水稻を主とし、養蚕、畜産、工芸作物としての葉タバコ等を生産している。中でも養蚕は、本県が全国第2位の収穫量を誇っており、その34.7%を本調査地域が生産している。しかし、最近の外国産輸入品との競合から年々減少し、昭和63年の5,755トンに対して2,116トンと、4割台にまでなった。

また、葉タバコも本県の主要作物のひとつで、生産量は全国第2位を誇り、そのうちの58%を本調査地域が生産し、船引町では県の19.6% (1,230トン)を生産する一大産地である。

農業基盤整備のうち水田のほ場整備率は、県全体では新旧整備を含めて76%にも達するが、本調査地域では53.7%に止まっている。このうち、新区画での整備率は48.3%に達し、整備率のほとんどを占めることから基盤整備の事業着手が比較的新しいことが解る。(第8表参照)

(注¹) 文中の表記で昭和59年の数値は「福島県勢要覧 (1984)」によつた。

(注²) 新区画とは、30a以上/区画を言い、旧区画とは30a未満/区画を言う。

(2) 林 業

福島県の林野面積は県土の69%を占め、本調査地域では更にその12%で113,501haに達する。本調査地域では人工林の育成が進み、県平均の36.9%に比べて51.5%と高い値を示している。気候、土壤等の立地条件が有用樹種の生育に適しているものと思われるが、近年は労働力の流失、賃金、資材の高騰による生産費の増大、木材需要の減少及び外材の圧迫による木材価格の低迷が長期化していることなどから、林業経営は非常に厳しいものになっている。

福島県では、「なめこ」「しいたけ」の栽培技術の交換と振興のために、(財)福島県きのこ振興センターを作りきのこ産地の形成促進及び銘柄化に努力している。(第9表参照)

2. 商 ・ 工 業

社会基盤の整備がすすむにつれて経済活動はますます盛んとなり、過去10年間と比べても製造品出荷額で90%、年間販売額では52%の伸びが見られる。本調査地域では県平均を大きく上回り、製品出荷額で125%、年間販売額で82%の伸びを示しているが、郡山市を除く町村の合計ではいずれも42%の伸びに過ぎない。このことから商工業においても中核都市部への集中傾向を見てとることができる。

福島県勢要覧によれば、事業所数1,376（昭和59年1,135）、製造品出荷額988,098百万円（同439,588百万円）及び商店数7,406（同9,727）、年間販売額2,015,124百万円（同1,107,959百万円）である。（第10表、工業・商業統計表参照）

高速交通網の整備が図られ、磐越自動車道・空港を結ぶトライアングルハイウェイが完成すれば、更に工場誘致が進むものと期待されている。

3. 観 光

本地域は、大滝根山を中核とする阿武隈中部高原県立自然公園があり、高柴山、五十人山等の軽登山やハイキング、釣り等のレクリエーションを楽しむことができる。

三春町には、樹齢1,000年以上と言われる天然記念物の滝桜、また滝根町にはあぶくま鍾乳洞があって観光客を集めているが、更に常葉町のかぶとむし王国（ムシムシランド）、滝根町の星の村等あらたな開発にも力が注がれている。

第5表 産業別就業者数

(単位：人，%)

市町村名	総 数		第1次産業		第2次産業		第3次産業		備考
	昭和59年	平成6年	昭和59年	平成6年	昭和59年	平成6年	昭和59年	平成6年	
福島県全体	1,027,123	1,067,909	(22.2) 227,744	(14.2) 151,443	(32.2) 330,978	(36.7) 392,124	(45.6) 467,857	(49.0) 523,179	
郡山市	138,888	155,759	(15.0) 20,881	(9.0) 13,986	(27.6) 38,365	(29.8) 46,417	(57.3) 79,552	(60.9) 94,871	
白沢村	4,797	4,782	(48.7) 2,335	(30.6) 1,464	(31.6) 1,515	(45.5) 2,175	(19.7) 946	(23.9) 1,142	
岩代町	6,180	5,868	(53.0) 3,274	(35.7) 2,093	(25.2) 1,555	(39.0) 2,286	(21.8) 1,345	(25.3) 1,487	
三春町	10,135	9,825	(32.3) 3,273	(18.8) 1,851	(29.2) 2,963	(37.6) 3,690	(38.3) 3,880	(43.6) 4,283	
小野町	7,441	7,230	(38.8) 2,888	(24.3) 1,758	(28.0) 2,085	(41.0) 2,967	(33.1) 2,465	(34.5) 2,493	
滝根町	3,035	3,046	(34.8) 1,056	(24.7) 751	(32.3) 980	(43.1) 1,312	(32.5) 986	(32.1) 979	
大越町	3,635	3,422	(40.1) 1,457	(24.2) 828	(32.6) 1,184	(44.9) 1,537	(27.3) 993	(30.9) 1,056	
都路村	2,127	1,955	(50.4) 1,072	(39.2) 766	(28.3) 603	(35.5) 694	(21.2) 451	(25.3) 494	
常葉町	4,064	3,828	(51.3) 2,086	(33.3) 1,274	(25.5) 1,035	(41.3) 1,581	(23.1) 938	(25.4) 971	
船引町	14,207	13,725	(48.5) 6,895	(31.1) 4,264	(25.5) 3,620	(37.9) 5,201	(26.0) 3,690	(31.0) 4,255	
川内村	2,208	2,148	(36.3) 802	(29.7) 639	(35.4) 781	(38.7) 831	(28.2) 623	(31.6) 678	
葛尾村	1,169	1,006	(60.7) 710	(48.4) 487	(20.3) 237	(29.5) 297	(19.0) 222	(22.1) 222	
計	197,886	212,594	(23.6) 46,729	(14.2) 30,161	(27.8) 54,923	(32.5) 68,988	(48.6) 96,091	(53.1) 112,931	

(注¹) 福島県勢要覧(1984, 1994)により作成。

(注²) 上段()内数字は、総数に対する割合を表す。

第6表 農家戸数及び耕地面積

(単位：戸，人，ha)

区分 市町村名	総世帯数		農家数				農家人口				経営耕地面積					
	総数	農家率	専業農家数	1種兼業農家数	2種兼業農家数	農家人口	総数	田	畑	うち牧草地	樹園地	総数	田	畑	うち牧草地	樹園地
福島県全体	636,616	20.4	12,089	21,598	96,057	648,918	156,012	106,598	33,602	3,220	15,812					
郡山市	106,453	10.5	959	2,041	8,126	57,256	13,718	10,500	2,417	101	801					
白沢村	1,786	71.3	67	314	892	6,980	1,503	790	180	23	534					
岩代町	2,323	64.9	109	248	1,151	7,920	1,860	709	489	124	662					
三春町	5,265	28.1	107	235	1,136	7,780	1,572	633	479	31	461					
小野町	3,490	36.2	91	313	860	6,481	1,436	803	616	77	17					
滝根町	1,343	43.0	46	136	396	3,072	625	308	314	76	3					
大越町	1,496	48.3	51	119	553	3,766	617	315	289	16	12					
都路村	953	66.5	44	100	490	3,012	864	484	227	115	153					
常葉町	1,685	57.6	124	275	572	4,804	1,066	495	501	38	69					
船引町	5,878	49.7	314	751	1,859	14,937	3,105	1,250	1,321	71	533					
川内村	1,028	52.1	41	133	362	2,492	730	465	242	112	22					
葛尾村	461	73.1	40	79	218	1,622	513	209	300	154	4					
計	132,161	17.7	1,993	4,744	16,615	120,122	27,609	16,961	7,375	938	3,271					

(注¹) 福島県勢要覧(1994)により作成。

(注²) 農家率は、農家総数を総世帯数で除した値である。

第7表 農業粗生産額

(単位：百万円)

区分 市町村名	農業粗生産額														
	耕種					畜産									
	計	米	麦 雑穀 豆類	いも 及び 野菜	果実 花卉	その他	養蚕	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他	加工 農産物	
福島県全体	298,374	230,663	110,327	2,304	68,470	34,237	15,325	3,449	64,041	15,419	14,057	16,438	17,802	325	221
郡山市	21,737	17,692	10,815	187	5,162	761	767	321	3,717	1,031	1,345	776	558	7	7
白沢村	1,910	1,253	798	13	370	37	35	197	460	155	202	103	-	-	-
岩代町	2,403	1,152	244	19	392	54	443	241	1,010	315	383	155	157	-	-
三春町	2,190	1,765	407	18	967	30	343	144	281	143	136	-	-	2	-
小野町	1,891	1,065	100	19	348	13	585	6	820	265	554	-	-	1	-
滝根町	1,146	622	46	8	285	6	277	-	524	197	319	-	8	-	-
大越町	974	669	46	11	292	6	314	2	303	205	95	2	1	-	-
都路村	1,304	201	17	4	117	14	49	43	1,060	197	156	-	706	1	-
常葉町	1,898	1,507	44	10	213	8	1232	16	375	355	19	-	-	1	-
船引町	4,397	3,429	263	34	915	56	2,161	202	766	466	205	33	57	5	-
川内村	956	269	18	5	91	5	150	3	684	84	112	219	269	-	-
葛尾村	1,767	307	5	3	55	3	241	-	1,460	683	71	202	465	39	-
計	42,573	29,331	12,803	331	9,207	993	6,597	1,175	11,460	4,096	3,597	1,490	2,221	56	7

(注) 福島農林水産統計年報 (東北農政局福島統計情報事務所・平成5～6年版) より作成。

第8表 水田のほ場整備状況

(単位：ha)

区分 市町村名	市町村面積 (km ²)	計 (ha)	面積とほ場整備状況				備 考	
			整 備		済			未 整 備
			新区画	率	旧区画	率	面積	率
福島県全体	13,781.62	114,792	63,894	55.6	23,241	20.3	27,657	24.1
郡山市	731.05	11,400	6,238	54.7	60	0.5	5,102	44.8
白沢村	48.40	864	526	60.9	—	—	338	39.1
岩代町	98.37	760	166	21.8	8	1.1	586	77.1
三春町	72.76	689	354	51.4	—	—	335	48.6
小野町	125.11	921	408	44.3	234	25.4	279	30.3
滝根町	50.70	349	183	52.4	166	47.6	—	—
大越町	36.66	357	109	30.5	124	34.7	124	34.7
都路村	125.37	568	35	6.2	—	—	533	93.8
常葉町	84.41	554	114	20.6	—	—	440	79.4
船引町	161.16	1,380	729	52.8	185	13.4	466	33.8
川内村	197.38	536	109	20.3	228	42.5	199	37.1
葛尾村	84.23	233	27	11.6	—	—	206	88.4
計	1,815.60	18,611	8,998	48.3	1,005	5.4	8,608	46.3

(注1) 水田面積及び整備済面積は、農地建設課の平成5年度調査による。

(注2) 新区画とは、30a以上/区画の大きさを言う。

第9表 林業の概要

(単位：km², ha)

区分 市町村名	市町村 面積 (km ²)	林野 総 面 積 (ha)				林種別森林計画面積 (ha)										
		合計	国有林 計	民有林保有形態別面積			合計	人 工 林		天 然 林		計				
				市町村 計	市町村 計	財産区		公社	私有	針葉樹	広葉樹		針葉樹	広葉樹		
福島県全体	13,781.62	982,575	380,045	572,530	11,462	38,363	24,288	30,174	468,243	921,330	329,410	10,597	340,007	65,708	515,615	581,323
郡山市	731.05	40,371	10,158	30,213	258	485	4,075	4,065	21,340	38,981	17,729	425	18,154	2,897	17,980	20,827
白沢村	48.40	1,828		1,828	50	1		1,777	1,676	1,676	297	19	316	119	1,241	1,360
岩代町	98.37	5,253	200	5,053		51	98	282	4,652	5,053	1,416	4	1,420	287	3,946	3,633
三春町	72.76	2,683	116	2,567		22		2,545	2,604	2,604	449	14	463	96	2,045	2,141
小野町	125.11	8,870	968	7,902	204	165		29	7,504	8,726	4,851	55	4,906	68	3,752	3,820
滝根町	50.70	3,659	1,074	2,585	31	226		7	2,321	3,505	2,338	55	2,393	59	1,053	1,112
大越町	36.66	2,209		2,209	30	5		6	2,168	2,189	971	-	971	58	1,160	1,218
都路村	125.37	10,405	5,866	4,539		216		247	4,076	9,926	5,894	217	6,051	389	3,486	3,875
常葉町	84.41	5,764	1,610	4,154	71	192			3,891	5,472	3,133	55	3,188	177	2,107	2,284
船引町	161.16	8,429	1,279	7,150	52	6			7,092	8,314	3,650	80	3,730	214	4,370	4,584
川内村	197.38	17,033	5,556	11,477	1,059	5,943		1,557	3,318	16,808	11,329	210	11,539	1,146	4,123	5,269
葛尾村	84.23	6,997	4,968	2,029	199	254			1,576	6,826	3,370	222	3,592	878	2,356	3,234
計	1,815.60	113,501	31,795	81,706	1,954	7,166	4,173	6,153	62,260	110,080	55,367	1,356	56,723	6,388	46,969	53,357

(注¹) 福島農林水産統計年報 (東北農政局福島統計情報事務所、平成5～6年版) より作成。

(注²) 市町村面積は福島県勢要覧 (平成6年版) より作成。

第10表 工業・商業統計表

(単位：人、百万円)

市町村名	区分		工業			商業			商			業			備考
	事業所数	従業員数	製造品出荷額	総数	卸売業	小売業	従業員数	年間販売額	従業員数	卸売業	小売業	従業員数	年間販売額		
福島県全体	7,804	244,237	5,124,606	36,404	6,927	29,477	174,515	6,286,008							
郡山市	923	28,168	776,998	5,743	1,841	3,902	36,914	1,933,499							
白沢村	39	1,237	21,176	72	6	66	153	2,044							
岩代町	40	1,041	13,339	147	3	144	445	5,661							
三春町	63	2,631	43,531	324	41	283	1,104	16,768							
小野町	70	2,126	57,241	263	28	235	971	13,741							
滝根町	32	638	5,780	86	5	81	240	3,869							
大越町	33	1,086	19,567	92	8	84	341	3,232							
都路村	17	225	1,416	50	2	48	136	1,937							
常葉町	32	1,104	15,825	111	8	103	340	4,464							
船引町	105	2,900	31,128	425	51	374	1,798	28,186							
川内村	15	367	1,823	73		73	149	1,249							
葛尾村	7	88	274	20	1	19	43	524							
計	1,376	41,611	988,098	7,406	1,994	5,412	42,634	2,015,174							

(注) 福島県勢要覧(1994)より作成。

福島県土地分類基本調査：常葉

各 論

I 地形調査

1. 地形分類

§ 1. 地形の分類

(1) 山地・丘陵地

- ① 山頂緩斜面(mT)…図葉域全体が広義の阿武隈山地に含まれるものの、山頂平坦面ないし緩斜面が高い密度をもって認められるのは図葉東半部の、標高ほぼ700m以上の地域においてである。そのうちでも、ひと続きの緩斜面としては、大滝根山(1192.5m)の北東稜線を含む山頂付近、桧山(992.5m)から西にのびる幅広い稜線一帯、さらに、東隣「浪江」図葉に続く五十人山(883.2m)山頂付近にそれぞれひろがるものが代表的である。これらはいずれもいわゆる阿武隈隆起準平原Ⅰ面(中村1960)にあたるが、ほかに、殿上山、葉山、鳴子山、鳶ノ巣、小猿合など高さ800mをこえる諸峰の周辺に、幅は狭いが長さ1kmに及ぶ緩斜面が分布する。また、これらより一段下位の、標高600mレベルの山頂緩斜面群(船引町中山、横道地区、常葉町早稲川、大越町大平山付近など)は隆起準平原Ⅱ面の名残りである。これらの山頂緩斜面群の多くは、とくに硬岩からなるものではなく、花崗岩類からなる山体上に残されており、侵蝕基準面から遠いところにつくられる遠隔残丘(Fernling)の例と考えられる。
- ② 山腹緩斜面(mF)…同じく図葉域東半部において、標高600~700mの、前記残丘群の山腹に肩状あるいは台地状にひろがるものが多い。殿上山南斜面、鎌倉岳東斜面、鳶ノ巣西斜面、桧山の北・東斜面などに分布するのは、いずれも隆起準平原Ⅱ面のレベルを示すものである。このほか、桧山の南西斜面や大滝根の北東斜面に認められるmFは、その高度からみて本来Ⅰ面相当の山頂緩斜面とされるべき地形面ながら、主峰に対す

る位置関係から山腹緩斜面として分類した。

- ③ 山麓緩斜面 (mP) …残丘として隆起準平原Ⅱ面上にピラミッド状にそびえる山体の裾に、広びろと展開する山麓緩斜面と、谷の最奥部(谷頭部)で谷底が滑らかに山腹斜面に移り変わる形の山麓緩斜面との二つのタイプがある。前者は移ヶ岳の北麓石沢付近、西麓長外路付近、鎌倉岳北西麓芦坂～小塚付近に標式的に発達し、後者は古道川上流部(都路村)や木戸川上流部(川内村)などにみられる。
- ④ 一般斜面 (G) …前記緩斜面と、次の急斜面を除く部分がすべて一般斜面であるが、その中でも、^{とがのもり}尖盛(922.2m)を含む山稜、一部大越町・常葉町の境となる大平山～水晶山の山稜は、それぞれⅠ面・Ⅱ面のレベルを示し、常葉町北部で600m前後の閉曲線で示される孤立峰群や、船引町の愛宕山(551m)、文珠堂のある丘(520m)、三春町との境の念仏壇(511m)などは、Ⅲ面(小池1967によれば常葉面・船引面)上に突出する残丘群である。
- ⑤ 急斜面 (St) …滝根町仙台平の石灰岩台地(Ls)の西斜面に、南北2km余りにわたって比高約200mの急斜面が連なる。ほかには、移ヶ岳、竜子山、鎌倉岳、鞍掛山、黒石山など残丘群の山頂直下に小規模の急斜面が認められる。

(2) 台地・段丘

- ① 石灰岩台地 (Ls) …滝根町と常葉町の境界に、南北約2km、東西最大0.5kmの石灰岩台地がひろがる。通称仙台平であるが、高さは南から仙台平870m、中山854m、駒ヶ鼻857mと若干起伏する。ドリーネなどのカルスト地形がみられるほか、地下には入水鍾乳洞、あぶくま洞などがある。北端部は石灰岩の採石場として大規模な人工改変を受けている。
- ② 上位砂礫段丘 (Gt I) …船引町長外路地区に標高450m前後の平坦面がかなり広く発達する。いわゆる段丘地形の特徴をよくそなえているのはこの付近だけであって、図葉域内に散在するGt Iの多くは丘陵斜面末端で河間に残されたもの(古道川、木戸川などの上流部)か、樹枝状

に発達する開析谷の支谷底が不協和合流するところで高次の支谷に切られて段丘化したもの（樋渡川、蛇石川、黒石川の各上流部）である。

- ③ 中位砂礫段丘 (Gt II) …図葉域内にはほぼ万遍なく分布するが、段丘面の形状は次の3種に分けられる。まず第一に、標式的な河成段丘として連続する平坦な段丘面と明瞭な段丘崖をもつので、船引町瀬川～門鹿地区(移川とその支流沿い)並びに門沢地区、大越町牧野～上大越地区(牧野川・堀越川沿い)、さらに滝根町菅谷地区(梵天川沿い)などに発達する。第二のものは、開析谷底にひろがる平坦面で、下位のGt IIIに切られて一段高位にひろがる段丘面である。この面そのものがさらに上位の谷底面を切ってGt Iをつくり出しているのは前述の通りである。図葉西端部、開析谷が高密度で刻みこみ、起伏量も図葉内他地区の丘陵地よりも若干大きいところにあたる。もうひとつのタイプはGt Iの場合と同様、丘陵斜面下部に、Gt IとGt IIIとの中間のレベルに認められる台地状の部分で、図葉域東部の丘陵地内に断片的に分布する。
- ④ 下位砂礫段丘 (Gt III) …地形面の連続性がやや大きいことと、分布密度が若干高いことを除いて上位2段の段丘面の発達状況とほとんど違いがない。下位段丘であっても谷沿いに十分なひろがりを獲得できなかったのは、最終氷期頃と思われるGt III形成期(猿内II層、吉田ほか1981)が比較的短く、広い谷底面を作り得なかったばかりか、すぐに侵蝕復活による下位面(谷底平野、Vp)の形成・拡大を受けて大半が削り去られてしまったからであろう。阿武隈山地の、おそらく最後の(小規模な、しかし広域に及んだ)隆起運動の影響は丘陵地内にも一定程度波及したが、水流による侵蝕力の微弱な小支谷はその影響を免れ、それらの上流部にGt IIIばかりでなくより上位のGt II、Gt Iをもよく残すことになったと思われるのである。

Gt IIIの分布で注目されるのは図葉中央南端の菅谷付近である。ここではかつて牧野方面から菅谷に流れていた夏井川左岸支流が牧野川の谷頭侵蝕によって石神地点で流路を奪われた結果、旧夏井川支流最上流部

が牧野川の谷となり、菅谷の谷は載頭されて石神—原屋敷間が風隙 (wind gap) となったのである (高橋1993)。この河川争奪の時期は従ってGtⅢ形成後であることがわかり、阿武隈山地内における最後の侵蝕復活の影響がここまで及び得た大滝根川水系と、及び得なかった夏井川水系との間の侵蝕力の差にその原因を帰すことができよう。

(3) 低 地

- ① 谷底平野 (V_p) …図葉域は、基本的に山地・丘陵地に無数の中小河川が刻み込むという地形構造が支配的であるため、低地の発達は極めて乏しいと言わざるを得ない。主要排水河川たる大滝根川並びに移川の流域に、樹枝上に細やかにはりめぐらされた水系ごとに確かに谷底平野は形成されてはいるものの、その幅は最大600m程度である。しかし、全体的にみると二つの特徴を認めることができる。すなわち、支流牧野川を含む大滝根川と移川の双方とも、谷底平野を広げているのはほぼ船引町の町域から上流側であって、そこから下流域では峡谷や遷急点の存在によって広がりを絶たれること、そしてもうひとつは、上流域にあっても、本流・支流を問わず、丘陵地の至るところにある小規模な峡谷 (狭嶺部) や遷急 (移) 点によって連続性が絶たれることである (たとえば常葉町石蒔田から定福に至る谷)。なお、谷底平野と、一部下位砂礫段丘を含む谷底面にあっては、隣りあう流域間で谷頭同士が向い合う形で谷中分水界を形成したり、争奪寸前の様相を呈したりするところがある (要田、荒和田、大山、遠山沢、井堀前、北之内など、中村1986)。
- ② 自然堤防 (NI) …谷底平野の広がりに乏しいこと以上に、自然堤防の発達がほとんどみられないのも本図葉域に目立つ特徴のひとつである。大部分が花崗岩類からなる山地・丘陵地からは、マサ起源の細粒推積物が谷底を満たすことはあっても、自然堤防を発達させるに足る砂礫の十分な供給は期待し難いのである。かくてNIの分布は大滝根川・牧野川沿いと、黒石川沿いの一部とに限られている。

(4) そ の 他

- ① 麓層面 (Cs) …花崗岩丘陵地にあつては細かく枝分かれした開析谷の谷頭部にはしばしば麓層面が形成される。そこは、水流の力が弱く、風化生成物たるマサが滞溜しやすいので、特有の浅く開いた断面をもつ麓層面がつくられやすいのである。図葉西半部、小起伏の丘陵地に多数分布するのがみられる。
- ② 遷移点…阿武隈山地東縁にみられるような大規模なKnick-pointは皆無ながら、段丘や谷底平野の垂直分布に段階的な特色をもたらす小規模な遷移点がところどころにみられる。とくに大滝根川上流域と、移川下流域において遷移点(群)の存在が段丘面・谷底平野の分布範囲をかなり制約している様子を読みとることができる。

§ 2. 地形地域の区分

地形面分布の地域的なまとまりに注目して以下18の地形地域(地形区)を設定した。本図葉域は、概略的に阿武隈山地主要部と、同山地西縁丘陵地とに分けられるので、その18地形区をいずれかに含ませて区分する。

A) 阿武隈山地主要部

I a 主分水山地…阿武隈山地を、太平洋側流域と阿武隈川流域とに分ける主分水界を含む山地。北から竜子山・鎌倉岳・鳴子山・桧山・尖盛・大滝根山の諸峰が、間に高さ600m前後の峠(鞍部)をはさんでゆるやかに起伏する。

I b～I e 残丘群…上記I aから西にはり出す移ヶ岳I b、殿上山I cと、主分水山地から切り離されて丘陵地内に高まる片曾根山I d、黒石三山(鞍掛・黒石・高柴山)I eとからなる。

III b～III d 山間侵蝕盆地…東隣「浪江」図葉内にひろがる古道盆地・川内盆地の最上流部にあたる。いずれも、古道川・木戸川沿いに段丘面・谷底平野面を伴っている。

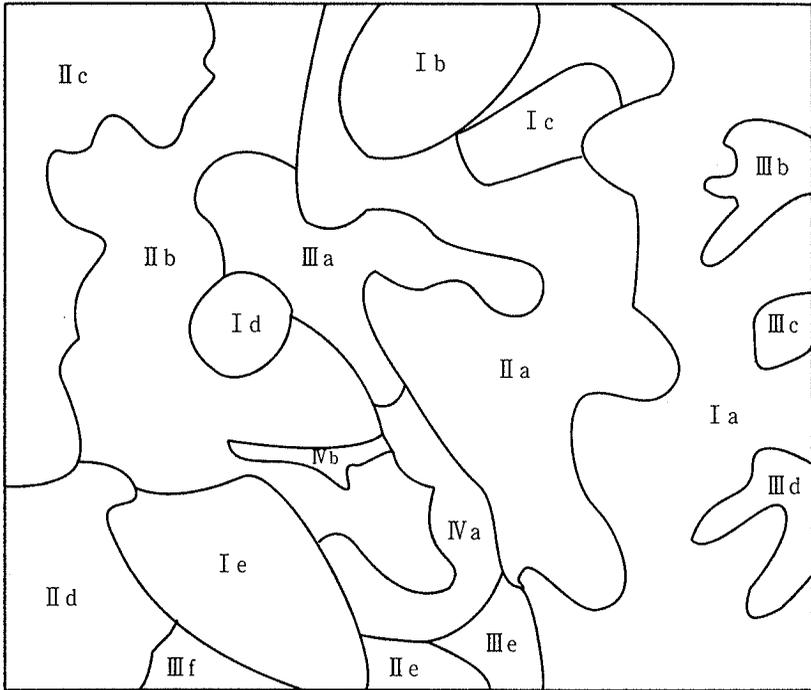
なお、A地域を構成する山々にはひとつの共通点がある。それは、山

体（山腹斜面）がほとんど開析されることなく、滑らかな斜面によって覆われていることであり、ここに、隆起準平原上の残丘地形の典型をみることができるのである。

B) 阿武隈山地西縁丘陵地

阿武隈山地西縁には、南は東白川郡から北は福島市付近まで南北約90kmに及ぶ標高500～200mの丘陵地が連なるが、本図葉内では低地（牧野川低地Ⅳa、堀越川低地Ⅳb）、台地（菅谷台地Ⅲe、浮金台地Ⅲf）、盆地（船引・常葉盆地Ⅲa）を含む一帯がこの西縁丘陵地を構成する。定高性を示すその丘陵背面は、隆起準平原Ⅲ面（低位侵食平坦面、木村1994）のレベルを示すものである。なお、山麓部丘陵Ⅱaと船引・常葉盆地Ⅲaの各東半部は、阿武隈山地主要部に入り込んだ「湾入低地」（ドイツのKöln、Münster、Leipzig等の湾入低地に類似する）の景観をみせている。

地形地域区分図



A 阿武隈山地主要部

I a 主分水山地

I b~I e 残丘群 (I b 移ヶ岳、I c 殿上山、I d 片曾根山、I e 黒石三山)

III b 岩井沢盆地 III c 古道盆地 III d 川内盆地

B 阿武隈山地西縁丘陵地

II a 山麓部丘陵 II b 船引丘陵

II c 三春丘陵 II d 柳橋丘陵

II e 飯豊丘陵 III a 船引・常葉盆地

III e 菅谷台地 III f 浮金台地

IV a 牧野川低地 IV b 堀越川低地

参 考 文 献

- 木村和雄 (1994) : 阿武隈高地北部の侵食小起伏面と後期新生代地形発達史
季刊地理学 46-1 1-18
- 小池一之 (1967) : 阿武隈川支流大滝根川流域とその周辺地域の地形について
駒沢大学文学部研究紀要 25 62-70
- 高橋潤一 (1993) : 阿武隈山地における谷中分水の一例—牧野川と梵天川を
例として— (演旨) 福島地理論集 37 42
- 中村嘉男 (1960) : 阿武隈隆起準平原北部の地形発達 東北地理 12 62-70
- 中村嘉男 (1986) : 船引町の地形 船引町史 通史編 31-52
- 吉田 義 ほか (1981) : 阿武隈山地中央部における第四系と植物化石群
第四紀研究 20 143-163

注：地形分類図作成にあたっては、図葉域南西部のほぼJR磐越東線より
南西部側を高橋が担当し、他の地域並びに全体の調整を中村が担当した。

(福島大学教育学部教授 中 村 嘉 男)
 福島市立三河台小学校教諭 高 橋 正 之)

2. 傾斜区分

地形面のひろがりを示す地形界の位置にとらわれることなく、地形図上の等高線の疎密から得られる地表面の傾斜を図化したのがオーバーレイで示された傾斜区分図である。しかしながら、図化にあたって、傾斜の向きを容易に求め難い場合（等高線間隔を機械的に求めると、むしろ地表面の現実の勾配を正しく表現できない場合—高い密度で細かな谷によって刻まれた斜面など）、地形分類図上の該当箇所から地表面の相互関係などを調べて補正したところも少なくない。

以下、傾斜区分階級ごとに、それぞれの分布状態の特色を説明し、自然環境の一要素としての傾斜分布の意味を考察する。

(1) 傾斜40度以上の分布

垂直に近いとさえ感じられる圧迫感をもって見る者に迫る急斜面は、あぶくま洞入口東面の石灰岩の大岩壁と、大根根鉦山周辺の切り立った壁面で代表される。ほかには、岩塔（tor）をとりかこむ急崖が発達する鎌倉岳山頂周辺と、採石場のある桧山の南斜面に分布する。山地といっても、深い峡谷などを伴わないおだやかな山容が広い面積を占める本図葉域には、この階級区分の急斜面の分布はごく一部に限られるのも納得されよう。

(2) 傾斜30度以上40度未満の分布

仙台平西側の急斜面を除けば、ほとんどすべて残丘群の山頂周辺に分布する。竜子山、移ヶ岳、鎌倉岳、片曾根山、黒石三山、大滝根山などのまわりである。そのほか、600m台のやせ屋根の両側にもみられる（図葉南西部、郡山市、小野町の境界部分）。

(3) 斜面20度以上30度未満の分布

前記2者よりも若干広い分布を示す。残丘群の山腹斜面のほか、標高600～700mの隆起準平原Ⅱ面中で大滝根川・牧野川などの局地的侵蝕基準面に近い部分、並びに同Ⅲ面でも郡山盆地により近接した部分で、いずれも比較的開析の進んだところがこれにあたる。

(4) 傾斜15度以上20度未満の分布

傾斜区分のレンジが上記(2)、(3)の2分の1しかないにもかかわらず、この階級の斜面の占める比率は次項(5)と並んで図葉中最も高い。分布する場所と地形面との関係をみると大きく三つに分けられる。まず、残丘群の中腹以下の斜面部分で、標高ほぼ700m台のところ著しい。高塚山(1066.4m)など、一部にはⅠ面レベルの山峰も含まれるが、概して開析度の低い残丘面が中心である。次に広いのは、いわゆるⅡ面を示す定高性山稜およびその両側斜面であり、標高600m前後の丘陵に目立つ。前述の地形区Ⅱaの大部分がこの傾斜区分内に含まれる。

もうひとつの分布域は図葉西半部の丘陵地で、次の(5)の傾斜区分と同様に、隆起準平原Ⅲ面を構成する丘陵背面(標高400~500m)と、その上に突出する残丘群(600m前後)を包みこむ領域である。なお、図葉北西部では大滝根川、八島川、移川の顕著な遷急部が丁度この傾斜区分の分布域と一致している(遷急部以外の地域は、より緩傾斜域となる)。

(5) 傾斜8度以上15度未満の分布

この階級の斜面は図葉内にほぼ一様に分布しており、関連する地形面もほとんどすべてにわたっている。換言すれば、図葉内で目立った急崖や全く平坦な低地を除いて、図葉域の地形の概括的特徴—なだらかな起伏を特色とする丘陵地—の平均的な姿を示すのがこの8°~15°程度の傾斜地(の集まり)であるといえよう。山頂・山腹・山麓各斜面の多くがこの区分内に含まれるのをはじめ、船引・常葉盆地Ⅲa、船引丘陵Ⅲb、三春丘陵Ⅱcの大半を占める小起伏地の一般斜面、さらに、細かく枝わかれした開析谷沿いの段丘群も、その個々の地形面の勾配だけでなく、その地形面と周辺斜面との平均傾斜をとるので、いずれもこの傾斜区分に入る確率が高くなる。

また土地利用の上からも、丘陵地におけるこのランクの傾斜地は、大きな障害となることも少なく、集落・耕地・交通路等の立地を支えるフロントとなっている。

(6) 傾斜3度以上8度未満の分布

連続する十分に広い平坦面・緩斜面の分布が著しく少ない本図葉域においては、小勾配の地形面はほぼ主要河谷沿いにしか認められない。そしてその分布状態も不連続かつ狭小・分散型である。人びとの生活の場である緩傾斜地が、このように限定的かつ拡散的であるのも、自然的背景が小起伏丘陵地を主体とすることに基づく。つまり、小起伏丘陵地であるが故に「どこにでも」居住が可能である一方、起伏地であるために「どこへ行くにも一定の不便さ」を避けられないのである。

この傾斜区分は、上記(4)、(5)とは異なり、一部の山頂付近を例外として、ほとんどすべて河谷沿いにあり、当然ながら、段丘分布地と高い相関をもつ。開析谷の十分に発達した丘陵地であるため、段丘地形、従ってこの傾斜区分の土地も、図葉域にほとんどくまなく分布しているのは前述の通りである。

(7) 傾斜3度未満の分布

前記は(6)よりもさらに分布は局限されて、主要河谷の谷底平野または下位段丘の部分のみがこれに該当する。段丘面や各種緩斜面上でも、局所的に傾斜3度未満の場所が全くないわけではないが、5万分の1地形図に表現し得る規模を考えればそれらは無視せざるを得ない。しかし逆にいえば、丘陵地における各地形面の各所に、平坦に近い部分が存在するために、全体として緩傾斜地として表現される場合が少なくないのであり、本図葉域のような丘陵地はまさにその典型的な例である。

(福島大学教育学部教授 中村嘉男)

Ⅱ 表層地質調査

1. 表層地質

本図葉は、阿武隈高地の主峰大滝根山（1,192.5m）の、北側から北西側、および、西側にかけての地域一帯を含む、阿武隈高地のほぼ中央部に当る。全域にわたって、花崗質岩石が発達している。

花崗質岩石は、Gr（Ⅰ）、Gr（Ⅱ）、Gr（Ⅲ）、および、Gr（Ⅳ）に区別できるが、Gr（Ⅰ）は図葉の北西部と南西部に、ややまとまって発達する。また、Gr（Ⅱ）は、図葉の西側の地域と、図葉の東側および北東側の地域に発達している。Gr（Ⅲ）は、図葉の中央部から東西の両側の地域の、大半を占めて発達する。Gr（Ⅳ）は、図葉南西部の海拔500m前後の丘陵地に、ごく小規模に分布する。

図葉北側のほぼ中央部から、図葉南西側にかけては、海拔630～990m前後の残丘状にそびえる山体のほぼ頂部に、斑禰岩を主とする岩石Gbが発達している。

大滝根山北西側の大越町早稲川地域から、西側の滝根町神俣地域にかけて、固結堆積物Sh、Ls、Sc、および、Scgからなる、滝根層群が発達している。その延長とみられる堆積物は、大滝根山南東の高塚山付近から、北北西方向に点在して発達し、常葉町西向の大滝根川南岸まで分布している。

図葉内を流れる、大滝根川、牧野川、堀越川などの沿岸の低地をはじめ、各支谷内に発達する低地には、河道ぞいに未固結堆積物sgが発達する。また、段丘を形成する未固結堆積物、smg、msg、smgpが、各地域に発達している。

海拔700mを越す山体の山麓地域には、発達の程度にはちがいはあるが、崩壊性の未固結堆積物clが分布する。

崩壊性堆積物の発達地域の多くは、緩斜面地形を形成しており、厚い火山灰層の残存地域となっている場合が多い。

ごく小規模な発達物として、火山碎屑性堆積物、Dtw、および、Dtが、図

葉西側の駒場地域に分布する。また、結晶片岩Schのごく小規模の露頭が、数地点で確認されている。さらに、安山岩質の岩脈 (An) が、図葉北西部に、半花崗岩質の脈岩Apが図葉東部の、鳴子山周辺などに分布している。

これらの表層地質は、第11表のごとく大区分で7、小区分で19に分けられる。

(1) 未固結堆積物

図葉内に発達する未固結堆積物は、sg、smg、msg、smgp、および、clの5つに分けられる。

未固結堆積物sgは、現河床および氾監原堆積物で、砂礫からなる。図葉内を流れる各河川の河道内に発達している。とくに、図葉北西部を流れる移川や、中央部を西方へ流れる大滝根川筋にそって、やや広く発達する。氾監原堆積物の発達状況は、河道の改修工事がすすんでいるため、正確には把握できないが、さきにのべた2河川の沿岸部に、わずかに分布する。厚さは最大でも1m前後である。

未固結堆積物smgは、図葉内の各地に分布する谷底低地を埋めて発達する。砂、泥、および、礫からなる堆積物である。大滝根川ぞいの常葉町常葉地域から、船引町春山地域にかけて、牧野川ぞいの大越町牧野地域から、船引町今泉地域にかけて、さらに堀越川の沿岸の地域などに、やや広範囲に分布している。また、図葉南部の滝根町菅谷地域にも、ややまとまった発達がみられる。谷幅の広い低地域では、砂・泥を主とする。谷幅の狭い地域では、砂礫質である。厚さは最大でも1.5m前後である。

以上の堆積物 (sg、および、smg) は、いずれも完新世の時期の堆積物である。堆積物smgは、大滝根川ぞいや牧野川ぞいの沿岸で、最低位の段丘地形を形成して (大滝根川ぞいの西向地域、牧野川ぞいの今泉地域など) 発達するところがある。

未固結堆積物msgは、低位の段丘を形成する堆積物で、泥、砂を主とし大越町牧野地域から上大越地域にかけては、有機質のシルトや細砂、一部泥炭質の地層を挟む堆積物からなる。礫層の発達は良くない。

第II表 表層地質区分

大区分	小区分	記号	堆積物(地層)・岩石	地質時代	
				新世	第四紀
未固堆積物	砂	sg	現河床および氾濫原堆積物 低地堆積物、石神層および最低位段丘堆積物 猿内I層、猿内II層および低位段丘堆積物 閑場層、山口層、船引層および中位段丘堆積物 崩壊性堆積物	完新世	第四紀
	シルト・砂・礫 泥・砂、有機質シルト・礫 砂・粘土・礫・泥炭 角礫・砂・泥	smg msg smgp cl			
固堆積物	頁岩	Sh	A層 B層 C層 滝根層群	先白垩紀	紀
	石灰岩	Ls			
固堆積物	頁岩、頁岩チャート薄互層	Sc			
	頁岩、チャート、緑色岩類	Seg			
火山碎屑性堆積物	石英安山岩質溶結凝灰岩	Dtw	白河層	更新世	第四紀
	灰白色粗粒火山灰	Dt			
火山岩	安山岩質岩石(玄武岩・安山岩)	An	岩脈	中新世	第三紀
	アブライト、石英斑岩	Ap	脈岩		
深成岩	細粒黒雲母花崗岩、複雲母花崗岩	Gr(I)	花崗岩質岩石(I)	白垩紀	中生代
	灰色黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩	Gr(II)	花崗岩質岩石(II)		
	角閃黒石雲母花崗門緑岩	Gr(III)	花崗岩質岩石(III)		
	淡紅色黒雲母花崗岩	Gr(IV)	花崗岩質岩石(IV)		
變成岩	斑斕岩、閃緑岩	Gb	斑斕岩質岩石	先白垩紀	紀
	黒雲母片岩	Sch	結晶片岩類		

図葉のほぼ中央部から、西および南西側にかけての、牧野川および堀越川ぞいの沿岸と、常葉から船引にかけての大滝根川南岸の各地に、ややまとまった発達をみるほか、図葉北側の移川の沿岸、および、図葉東側の桧山川の沿岸などに分布している。

牧野川ぞいの大越町牧野から栗出、および、滝根町菅谷から、大越町上大越の南部地域に発達するmsgは、軽微な不整面を境として、下位の猿内Ⅰ層と、上位の猿内Ⅱ層に分けられる。段丘面をつくるのは、上位の猿内Ⅱ層である。

猿内Ⅰ層および猿内Ⅱ層からは、亜寒冷地性～寒冷地性の豊富な植物化石が産しており、また、多くの¹⁴C（放射性炭素法）による年代測定値から、最終亜間氷期をはさむ、寒冷期の堆積物であることが判明している。猿内Ⅱ層は、最大10m前後、猿内Ⅰ層は4m+（下限不明）の厚さを有する。ボーリング資料によると、菅谷地域の谷部では、最大20mを越える厚さの埋谷堆積が知られている（柱状図⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、および、図参照）。

牧野川中流から下流にかけての地域と、大滝根川沿岸、および、その他の各地に発達するmsgは、砂質堆積物が優勢で、砂礫質である。厚さも5m前後と薄いですが、埋谷堆積物として、かなりの厚さに達するところもある（柱状図①参照）。

未固結堆積物smgpは、中位の段丘を形成する堆積物で、粗粒砂を主とし、泥、礫などからなるが、地域により（船引町時宮、鳥足、大越町高屋敷、平松、水神宮などの各地）泥炭、または、泥炭質粘土層を挟む。

船引地域に発達する船引層、大越町上大越地域に発達する山口層、牧野地域に発達する関場層のほか、牧野川下流地域や堀越川の沿岸、および、大滝根川ぞいの常葉、小桧山の各地に、散在的に分布している。

最さは4m+である。

未固結堆積物clは、角礫を主とし、泥、砂を混える崩壊性の堆積物で、図葉北部の移岳（994.5m）、殿上山（810.7m）、葉山（813m）、鎌倉岳（967.1m）、竜子山（980.9m）、図葉東部の鳴子山（764.9m）、五十人山

(883.2m)、桧山 (992.5m)、尖盛 (922.2m)、大滝根山 (1,192.5m)、図葉西部の片曾根山 (718.6m)、鞍掛山 (794.8m)、黒石山 (864.5m)、高柴山 (884.4m) などの周辺の地域に、緩斜面地形を形成したり、山麓部の丘陵の陵線部を形成する堆積物として分布している。

大半は、山体斜面の崩壊による堆積物とみられるが、なかには、古い土石流堆積物と思われるものもある。

堆積物clの発達している地域には、しばしば、火山灰層の厚層がみられることが多い。表層地質図に、その分布範囲を示しておく。

さきへのべた堆積物msg、smgpは、いずれも更新世の時期の堆積物である。堆積物clには、新期の堆積物と古期の堆積物がある。新期の堆積物は、ほとんど風化がすすんでいない。また、火山灰層にもおおわれていないことから、完新世の時期のものとみられる。一方古期の堆積物は、丘陵の稜線部に発達し、風化がすすんでいること、火山灰層におおわれることから、更新世の時期の堆積物とみられる。

さきに、中位段丘堆積物のひとつとしてのべた関場層は、古期の崩壊性堆積物の一部が、現在の低地域まで侵入したものとみられるものである。

(2) 固 結 堆 積 物

大滝根山西側の、大越町早稲川地域から、滝根町神俣地域にかけて、石灰岩、頁岩、砂岩、チャート、塩基性岩、超塩期性岩類などを原岩とする、固結堆積物がまとまって発達している。同様のものは、大滝根山東南方の高塚山付近から、北北西方向の常葉町西向の大滝根川の地域まで、花崗岩中の捕獲岩・ルーフペンダント（屋根岩）として、点在している。

これらの固結堆積物は、滝根層群とよばれている。あとでのべる花崗岩類の接触変成作用をうけ、石灰岩は結晶質石灰岩に、頁岩や砂岩などはホルンフェルスに、塩基性岩類は角閃岩などになっている。

大滝根山西方の滝根層群は、ほぼ南北方向の走向で、西傾斜の部分が多く、みかけ上は西側上位であるが、西傾斜の褶曲軸面をもつ転倒褶曲がみられることから、全体として逆転しているとみなされている。詳細につい

ては不明なところが多いが、西側から、A層、B層、C層に区別されている。

A層は、おもに粗粒の方解石からなる結晶質石灰岩Lsからなる。西側に頁岩起源のホルンフェルスShをともなう。層厚は200m以上である。

B層は、おもに頁岩起源のホルンフェルスからなるが、珪質頁岩を原岩とするホルンフェルスをはさんだり、それと互層する部分も多い。全般に微褶曲構造がいちじるしい、A層とは整合である。

C層は、おもに頁岩とチャートの薄互層、塩基性の凝灰岩や火成岩起源の角閃岩、および、蛇紋岩化した橄欖岩・輝岩などの緑色岩類からなり、層状チャート、砂岩起源のホルンフェルスをともなう、ホルンフェルスと緑色岩類とは、数m～数十mの単位で繰返して露出する。B層とは整合と考えられている。

A層に含まれる石灰岩の延長とみなされるものは、さきのにべたように、常葉町西向地域の大滝根川南岸を北限とし、常葉羽山岳周辺にややまとまった岩体として分布するほか、大越町泉沢南部、五条付近ほか、常葉町早稲川上遠野、根子田の各地域に、点在して小規模な分布がみられる。

B層の一部とみられるものは、大越町下大越地域の大平山（660.2m）南～西側の地域に、ややまとまって分布するほか、常葉町早稲川根子田地域周辺にも、点在している。

C層の一部とみられるものは、大滝根山の山頂部をはじめとして、その南東方の高塚山周辺、大滝根山北側の屋根筋に発達するほか、その西方の、鷲ノ巣（804.8m）周辺の地域に分布する。

滝根層群の地質年代については、化石の産出がないこと、層相が特異なため、近隣各地域の相当層との対比がむずかしいことなどから、特定されていない。花崗岩類による接触変成作用をうけていることから、先白亜系とされている。

(3) 火山碎屑性堆積物

図葉西部の、船引町春山地域駒場周辺の地区と、船引町南部の門沢地域に、ごく小規模な分布がみられる。

駒場周辺の地区では、ごく弱く溶結した石英安山岩質溶結凝灰岩Dtと、その下位の、非溶結の灰白色粗粒火山灰Dtとからなる。

門沢地域には、Dtのみが発達する。

これらは、その層相から、白河層の一部とみられる、前期更新世の時期の堆積物である。

(4) 火 山 岩

本図葉内に分布する火山岩は、岩脈として花崗岩中に貫入する、安山岩質岩石（玄武岩・安山岩）Anで、図葉北西隅の、三春町富沢地域に分布する。

(5) 半 深 成 岩

花崗岩体中には、しばしば、優白色細粒の岩石が、脈岩状に貫入するのがみられる。本図葉内では、北東部の葛尾村野川地域から、その南方の鳴子山周辺、さらにその西方の常葉町西向付近にみられる。岩質はアプライト、および、石英斑岩Apである。

(6) 深 成 岩

① 花崗岩質岩石

本図葉の大半を占めて発達する花崗岩質岩石は、その岩相上の特徴から、花崗岩質岩石（Ⅰ）、花崗岩質岩石（Ⅱ）、花崗岩質岩石（Ⅲ）、および、花崗岩質石（Ⅳ）に区分される。

花崗岩質岩石（Ⅰ）・Gr（Ⅰ）は、優白色細～中粒の黒雲母花崗岩で、黒雲母のほか、しばしば白雲母を含む特徴がある。図葉北西部の三春町富沢地域に小規模に分布するほか、図葉南西部の、鞍掛山～高柴山付近に、ややまとまって発達している。

花崗岩質岩石（Ⅱ）・Gr（Ⅱ）は、灰白色の中粒～粗粒の黒雲母花崗岩、および、斑状黒雲母花崗岩からなる。図葉西側の、三春町富沢地域から、その南方向の、郡山市中津川から小野町浮金までの地域、および、高柴山東側の地域と、図葉東側の、五十人山（883.2m）周辺の地域、楡山（992.5m）からその南方の高塚山（1,066.4m）の地域にかけて分

布している。

図葉西側の地域に分布するGr (Ⅱ) は、北部の地域ほど、粗粒で斑状の程度が高い。南部では、斑状の程度は低く均質となる。また、さきへのべたGr (Ⅰ) とは、一部漸移するようにみられる。

花崗岩質岩石 (Ⅲ) ・Gr (Ⅲ) は、おもに粗粒の角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる。図葉中央部から東部の大半の地域に分布するほか、図葉西側の地域にも分布する。図葉北西部では、さきへのべたGr (Ⅱ) と、断層で接している。捕獲岩を多く含む。

花崗岩質岩石 (Ⅳ) ・Gr (Ⅳ) は、図葉南西部の郡山市黒木地域、および、その西側の地域に小規模に分布する。中～粗粒の黒雲母花崗岩で、カリ長石が淡紅色を帯びていることから、岩体がこの色で特徴づけられる。しばしば、ペグマタイトを伴う。

② 斑糲岩質岩石

本図葉の北部ほぼ中央から、図葉南西部の地域にかけて、残丘状にそびえる葉山 (813m)、殿上山 (810.7m)、移岳 (994.5m)、片曾根山 (718.6m)、鞍掛山 (794.8m)、黒石山 (864.5m) などの山頂部には、一部橄欖岩を伴う角閃石斑糲岩体が発達している。また、高柴山 (884.4m) の東側と北方には、閃緑岩の小岩体が発達している。さらに、船引町西の文珠地域には、橄欖石斑糲岩の小岩体が分布する。これらの岩石は、斑糲岩質岩石Gbとして一括し、表層地質図中に示した。

(7) 変 成 岩

本図葉内に発達する花崗岩類の中には、捕獲岩体として、結晶片岩Schが、図葉北西部の三春町実沢地域と、図葉東部の鳴子山 (764.9m) 東部にみられる。おもに黒雲母片岩である。

(8) 地 質 構 造

本図葉の北西部には、Gr (Ⅱ) とGr (Ⅲ) との間に、北北東～南南西方向をとる断層の発達がみられる。この方向は、その東側に発達する岩脈Anの貫入方向とほぼ一致しており、図葉西部の地域には、これらの方向

性をとる断裂的弱線を形成するような、運動があったとみられる。

また、図葉南東部に発達する滝根層群は、その一部が、ほぼ東西性の断層や、東北東～西南西方向、北東～南西方向の断層で断たれるが、走向はほぼ南北方向をとって分布している。さらに、花崗岩体中に点在する同層群の一部とみられるものは、北北西～南南東の方向線上に配列しており、この方向は、図葉内に発達する花崗岩質岩石の、大局的な配列形態と調和的であり、花崗岩体の形成期の、構造的規制を反映しているものとみられる。

一方、図葉内に分布する未固結堆積物は、崩壊性堆積物を除き、ほぼ水平に発達している。残丘状にそびえる山体の山麓部に分布する崩壊性堆積物は、ゆるやかに低地側に傾むく、緩斜面を形成して発達している。

2. 応用地質

本図葉の範囲内には、目ぼしい金属資源は知られていない。非金属資源としては、石灰岩、珪長石などがある。また、岩綿（ロック・ウール）の製造に用いられた、橄欖岩が小規模に分布するにすぎない。

谷部の未固結堆積物の発達地域には、自由地下水が含まれる。また、図葉内の残丘状にそびえる山地の山麓部には、マサ化した花崗岩中に相当量の地下水が賦存しているとみられる。

牧野川中～上流部、および、掘越川の谷の一部には、地域によって、未固結堆積物msgの下位に、泥炭質の地層をはさむ、軟弱な未固結堆積物msgが、やや厚く発達する地域がある。このような地域では、N値が10または20以下の、軟弱な地盤の土地となっている。

(1) 地下資源（非金属資源）

本図葉内には、採掘の対象となっている石灰岩がある。ひとつは、滝根層群A層中の石灰岩である。もうひとつは、常葉町羽山岳一体に分布する石灰岩である。いずれも、花崗岩の貫入をうけ、結晶質石灰岩となっている。図葉東南部の、高塚山南南東にも、ややまとまった石灰岩（主部は小野新

町図幅の地域となる)が発達し、最近採掘の対象のひとつとなっている。

ごく小規模ものは、大越町泉沢、五条付近、常葉町早稲川上遠野、根子田、西向などにも分布するが、採掘の対象とされているのは、泉沢地域のものである。

珪長石は、ペグマタイト鉱床として発達するもので、その発達には花崗岩質石Gr (Ⅱ) の貫入に、深く関連があるものとされている。本図葉西側の地域に点在して発達するが、本図葉内には大規模なものは分布していない。

ロック・ウールの原料としての橄欖岩は、本図葉内各地に、散在して発達する。斑礫岩質岩石Gb中に産する。現在は石材としてのみ、一部採掘されているにすぎない。

(2) 燃料資源

本図葉内に発達する、未固結堆積物smgp (山口層、船引層など) 中には、一部にやや木質の泥炭が含まれており、地元民によって、燃料資源として、利用された記録がある。

(3) 水資源

本図葉内に分布している、花崗岩質岩石Gr (Ⅰ)、Gr (Ⅱ)、Gr (Ⅲ)、および、Gr (Ⅳ) は、いずれも風化がすすんでおり、とくに、山体部では、相当の深さまで、いわゆるマサ (真砂) 化していることが多い。地下水の帯水層としての役目をはたしている。

また、谷部に発達する未固結堆積物smg、および、その下位に発達する未固結堆積物のmsgは、砂質層の発達が比較的よく、その基盤となる花崗岩質岩石のマサ化の部分も含めて、自由地下水の帯水層となっている。とくに、移川、大滝根川、牧野川、堀越川などの沿岸地域では、比較的豊富な地下水が賦存するとみられる。ただし、その絶対量はあまり多くは望めないと思われる。

(4) 災害地質

さきにもふれたように、牧野川中～上流域、および、堀越川ぞいに発達

する、未固結堆積物smgの下位に、有機質や泥炭質の堆積物を含む、未固結堆積物msgが、やや厚層に発達する地域がある。

牧野川ぞいの上大越地区、滝根町菅谷地区、その西方の大越町牧野地区の一部などのほか、船引町堀越地区の一部である。柱状図の⑩、⑫、⑬～⑮に示したように、地下10～15m付近まで、N値が20以下であり、重量構造物の支持地盤には不適である。

また、本図業内に発達する、残丘状にそびえる山体の山麓部の各所には、崩壊性の堆積物clが分布している。山体をつくる花崗岩質岩石も、風化がすすんでおり、植生の条件によっては、強雨の際、地表を流下する雨水による洗堀が発生しやすい。土砂の流出や、谷部では土石流の発生も懸念される。安易に草地化などを計画することなどは、つつしむべきであろう。

参 考 文 献

- 福島県企画開発部（1964）：福島県鉱産誌、福島県、296.
- 経済企画庁総合開発局（1972）：20万分の1表層地質図「福島県」、土地分類図「福島県」、経済企画庁総合開発局、4～9.
- 日本の地質（東北地方）編集委員会（1989）東北地方（日本の地質2）、共立出版、338.
- 永広昌之、蟹沢聡史、竹谷陽二郎（1989）：阿武隈山地中央部大滝根山西方に分布する先第三系滝根層群、福島県博物館紀要、No. 3、21～37.
- 大森昌衛、鈴木敬治（1968）：5万分の1表層地質図「郡山」、土地分類基本調査「郡山」、経済企画庁、1～31.
- 鈴木敬治、吉田義（1988）：5万分の1表層地質図「川俣」、土地分類基本調査「川俣」、福島県、23～32.
- 鈴木敬治、吉田義、堀内俊秀、白瀬美智男（1991）：5万分の1表層地質図「浪江・磐城富岡」、土地分類基本調査「浪江・磐城富岡」、福島県、26～40.
- 吉田義、伊藤七郎、白瀬美智男、堀内俊秀、真鍋健一、鈴木敬治、竹内貞子、野中俊夫、楡井良政、楡井典子（1981）：阿武隈山地中央部における第四系と植物化石群—最終氷期における東北南部の植生変遷の一例—、第四紀研究、20、3、143～163.
- 渡辺万次郎、三本杉己代治、鈴木敬治、水戸研一（1955）：20万分の1福島県地質図・同説明書、福島県、34.

（元福島北高等学校教諭 吉 田 義）
（福島大学教育学部教授 真 鍋 健 一）

Ⅲ 土 壤 調 査

1. 農 地 土 壤

台地および低地の土壌

常葉闊葉の農耕地は、中央を流れる牧野川と大滝根川流域の低地と、片曾根山を中心とした阿武隈山系の台地に、モザイク状に分布する。両河川の下流域には、畑地土壌としては、礫が無く粘質の褐色森林土が主体となしており、中流域には、黒ボク土と土性が細粒な低地土壌が散見される。

水田土壌としては、細粒なグライ土が常葉地域全体に分布しており、牧野川、大滝根川の主流に灰色低地土、黒ボク土が混在している。

(1) 黒 ボ ク 土

表層に黒色または黒褐色の腐植層をもつ火山灰土または火山灰質土であり、腐植層の厚さは、20～60cmの範囲にある。農地造成や基盤整備地では埋没土層のみられるところもある。

表層の腐植含量、礫層の有無により3土壌統に区分した。

① 厚層多腐植質黒ボク土壌

・ 菅 谷 統

母材は非固結火成岩（火山灰土）であり、全層が多腐植層で腐植層の厚さは60cm以上あり、下層には礫層が無い。土色は黒褐色～暗褐色、土性は埴壤土～軽埴土で、滝根町菅谷、常葉町休石・早稲川に分布する。土地利用は普通畑である。火山性土壌であるため、りん酸質資材の施用が必要であるが、生産力は中程度である。

② 表層多腐植質黒ボク土壌

・ 横 道 統

母材は非固結火成岩（火山灰土）であり、表層が多腐植層で腐植層の厚さは30cmあり、下層には礫層が無い。土色は表層が黒色～黒褐色、下

層は褐色～橙色で、土性は埴壤土～軽埴土が主で、船引町横道と常葉町雨乞平に分布している。土地利用は、普通畑と桑園であり、生産力は中程度である。

③ 表層腐植質黒ボク土壌

・ 田 沢 統

母材は主として固結火成岩の崩積土であるが、火山灰の混じっているところもある。表層には腐植層があり、下層には礫層が無い。土色は表層が黒褐色～黒色、下層は褐色～にぶい黄褐色で、土性は埴壤土～砂質埴壤土が主である。船引町および大越町の牧野川と大滝根川流域の低地に点在している。土地利用は、普通畑と桑園であり、生産力は中程度であるが、りん酸吸収係数はやや高いので、りん酸質資材の施用が必要である。

(2) 褐色森林土

主として阿武隈山地の緩斜面に分布しており、湿潤な森林に発達した土壌である。表層は褐色ないし暗褐色で、下層は一般に黄褐色を呈するが、分布する地形によって腐植含量や土性は異なる。母材は、花崗岩および安山岩の残積土である。土性を基準に5土壌統群に区分した。

① 北 鹿 又 統

花崗岩を母材とする粘質ないし強粘質の畑土壌である。土色は黒褐色～暗褐色を呈し、下層には礫が無い。土性は埴壤土～軽埴土で大越町の金山平近辺に点在する。土地利用は、普通畑と桑園であり、生産力は中程度で、酸性矯正を要する土が多い。

② 新 殿 統

花崗岩を母材とする粘質の畑土壌である。土色は黒褐色を呈し、下層には礫が無い。土性は砂質埴壤土～埴壤土で、常葉地域全体に散在している。土地利用は普通畑でタバコが多く、また、桑園としても利用されている。生産力は中程度で、酸性矯正する必要がある。

③ 上川崎統

花崗岩を母材とする強粘質の畑土壤である。土色は褐色～黄褐色を呈しており、腐植層はなく、土性は主として軽埴土である。片曾根山西部の比較的、低地に帯状している。土地利用は普通畑で、生産力は中程度である。

④ 杉沢統

花崗岩及び安山岩を母材とする強粘質の畑土壤である。土色はにぶい黄褐色を呈しており、腐植層はなく、土性は主として埴壤土～砂質埴壤土である。常葉地域全体に広く分布している。土地利用は普通畑、桑園であり、表土および有効土層厚さが薄く生産力は低い。

⑤ 下川崎統

花崗岩及び安山岩を母材とする砂壤土の畑土壤である。土色は黄褐色を呈しており、腐植層はない。常葉町富岡地区、白沢村庄司地区等に分布し、土地利用は桑園が主体である。かなり酸性の土壤であり、表土も薄く生産力も低い。

(3) 褐色低地土

河川流域の低位段丘面や低地に分布する沖積土壤である。

全層あるいはほぼ全層が褐色～にぶい黄褐色の土色を呈し、土性は砂質～壤質である。土性を基準に2土壤統群に区分した。

① 横塚統

母材は非固結堆積岩である。土性は粘質、表層は腐植層がなく、土色は全層が褐色を呈する畑土壤である。船引町中ノ内、惣太郎付近に点在し、土地利用は普通畑で、生産力はやや高い。

② 石畑統

母材は非固結堆積岩である。土性は壤質、表層は腐植層がなく、土色は全層あるいはほぼ全層がにぶい黄褐色に土色を呈する畑土壤である。

船引町四城内前に点在し、土地利用は普通畑で、過干のおそれがある土壤で灌水対策が必要であり、生産力はやや低い。

(4) 細粒灰色低地土壤

河川流域の低地や下位砂礫段丘等に分布する、沖積堆積物を母材とする水田土壤である。全層あるいはほぼ全層が灰色または灰褐色を呈し、土性は、粘質～強粘質である。

・ 赤羽統

沖積および崩積堆積物を母材とする腐植の多い水田土壤である。船引町石森、大越町高屋敷に点在する。生産力は中程度である。

(5) 中粗粒灰色低地土壤

細粒灰色低地土と同様の堆積様式および土壤生成作用を受けた、土性が壤土～砂壤土の水田土壤である。土色は灰褐色が多い。

・ 遠下統

表層は埴壤土、下層は砂壤土の土性で、40cm以下になると砂土が出現する。大滝根川沿いに発達した水田土壤で、常葉町荒町の土壤が該当する。

土色は黒褐色を呈し、生産力は中程度である。

(6) 礫質灰色低地土壤

表層、次層の土色が灰色または灰褐色を呈し、砂質であるか、または下層に砂礫層が60cm位から出現する水田土壤である。

・ 南移統

表層、次層の土色がオリーブ黒を呈した埴壤土～砂質埴壤土の水田土壤であり、60cm以下から礫層が出現する。グライ層はなく、生産力は中程度である。

(7) 細粒グライ土壤

沖積および崩積堆積物を母材とし、全層もしくは作土下層に、鉄の還元色による青灰～青色を呈するグライ層が認められる水田土壤である。グライ層が出現する位置により2土壤統群に区分した。

細粒強グライ土壤

・ 芦 沢 統

作土直下からグライ層になり、土性は強粘質の水田土壤である。主に本図葉の船引町から大越町にかけての牧野川沿い、常葉町北部の水田地帯に分布するが、さらに各地に点在する。湿田が多いので排水対策が必要である。生産力は中程度である。

・ 上太田 統

作土直下からグライ層になり、土性は粘質の水田土壤である。白沢村西小屋を中心とした周辺の低地、船引町遠山沢の低地の水田に分布する。湿田が多いので排水対策が必要である。生産力は中程度である。

細粒グライ土壤

・ 牧 野 統

表層から50cmまでは灰色で、土性は強粘質、軽埴土の水田土壤である。

50cm以下からグライ層になり、一部に重埴土の所もある。

(8) 泥 炭 土 壤

沼沢地に繁殖したヨシなどの植物遺体が、未分解のまま堆積している低地の集積有機質土壤である。

・ 小戸神 統

全層または作土下より泥炭層になる。土色は黒色～黒褐色を呈している。土性は作土が埴壤土～重埴土で、滝根町菅谷にみられる。生産性は低い。

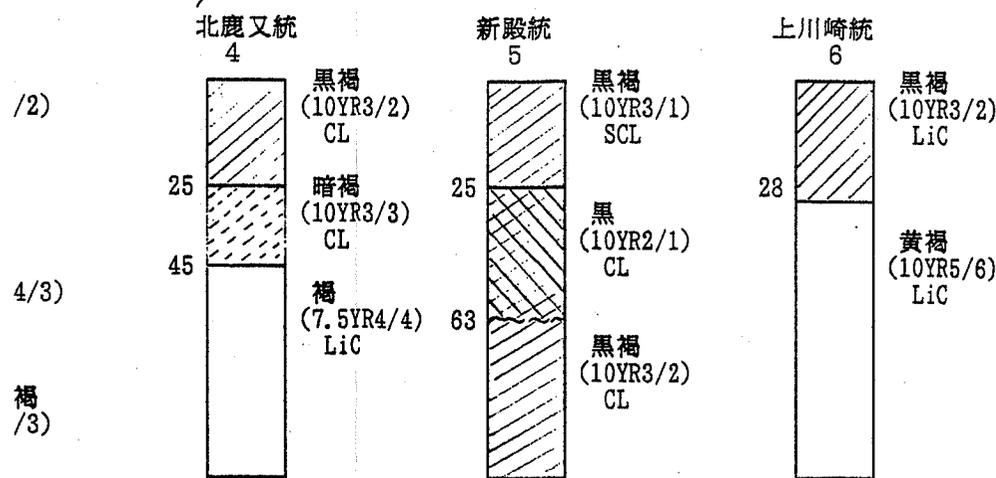
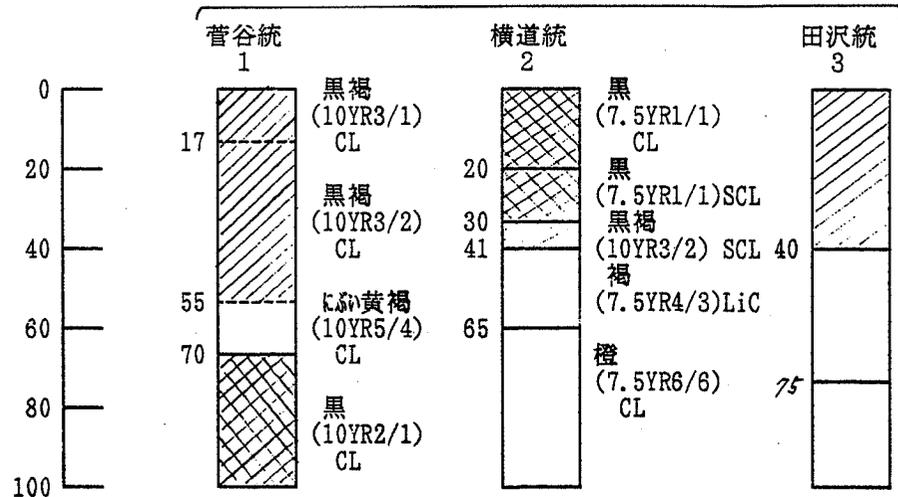
(福島県農業試験場 専門研究員 吉田 衛 史)

柱状断面図

台地および低地土壌

黒ボク土

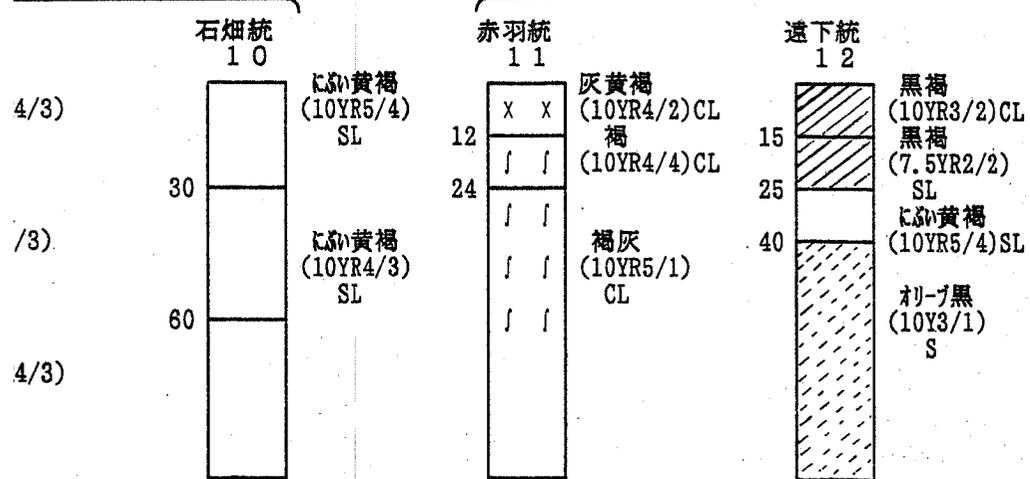
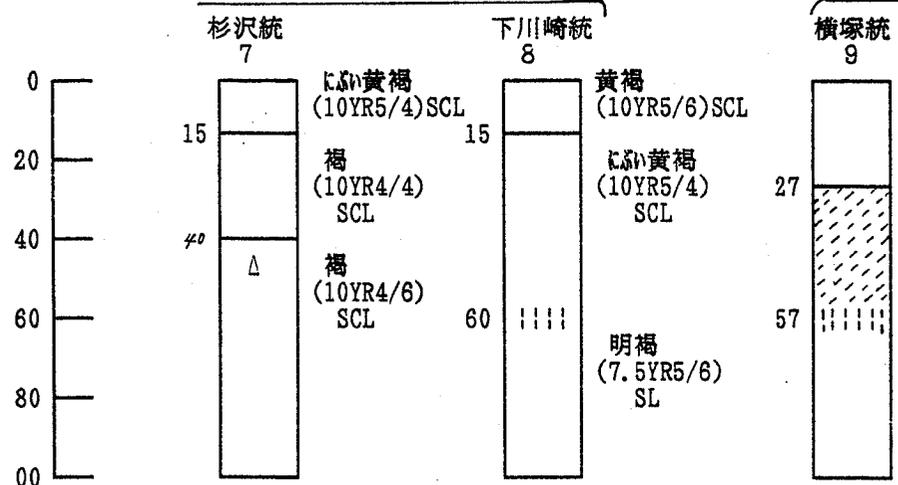
黄色森林土



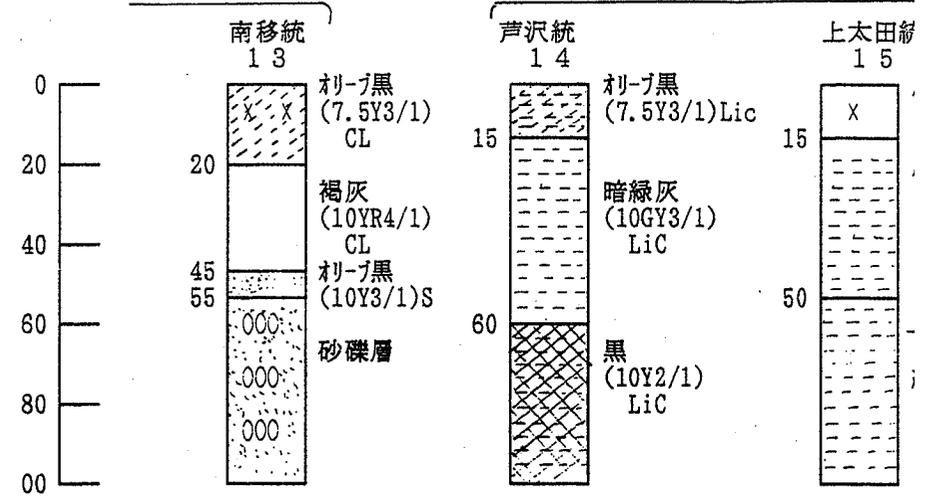
黄色森林土

褐色低地土

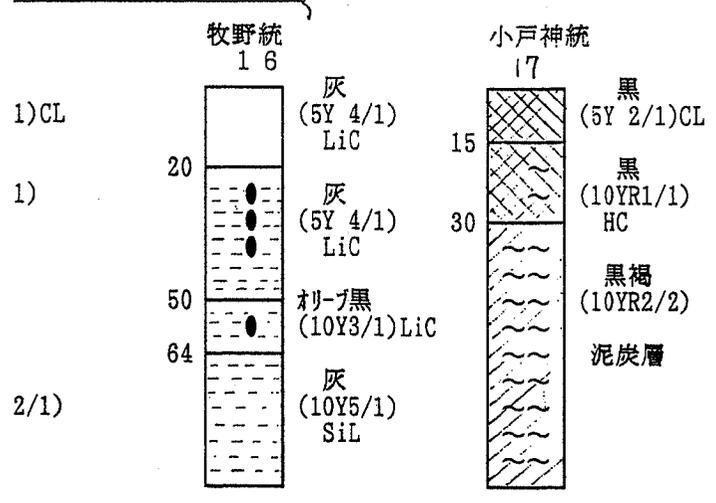
灰色低地土



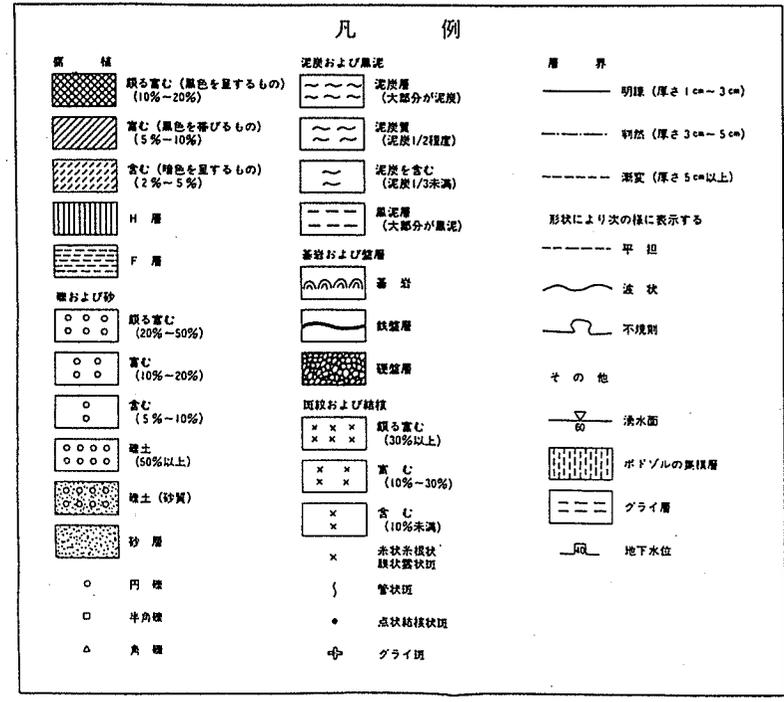
細粒グラ



土



泥炭土壌



参 考 文 献

福島県農業試験場（昭和48年）：水田および畑地土壌生産分級図、福島県阿
武隈山系中部地域（田村郡三春町、船引町、常葉町、大越町、滝根町、
小野町）

福島県農業試験場（昭和48年）：水田および畑地土壌生産分級図、福島県阿
武隈山系北・中部地域（相馬郡飯館村、双葉郡浪江町、葛尾村、田村郡
都路村）

福島県農業試験場（昭和53年）：地方保全基本調査総合成績書

福島県農業試験場（平成3年）：農芸化学部試験成績書

船引町役場：船引都市計画総括図

福島県：福島県三春土木事務所管内図（平成6年）

（福島県農業試験場 専門研究員 吉田衛史）

2. 林地土壌

山地および丘陵地の土壌

「常葉」図葉内の土壌の特徴は、駒ガ鼻・仙台平付近に局所的に出現している暗赤色土壌、図葉内に広く安定的に見られる褐色森林土壌、さらに山麓地の凹地の所々に認められる黒色土壌の三区分に大別される。

出現している土壌統は黒ボク土壌1、乾性褐色森林土壌4、暗赤色土壌(乾性型)1、適潤性褐色森林土壌4、暗赤色土壌(適潤型)1、湿性褐色森林土壌2の合計13統である。これらの土壌は、地形、地質の影響を受け、また、植生の遷移により現在見られる土壌形態を示すことは勿論であるが、本図葉は特に石灰岩、変成岩、頁岩、斑れい岩が局部に見られ、これに花崗岩類が広い範囲に分布している。

土壌統は特に地質を反映させたが、成熟した土壌以外に、未熟なものも含まれている。

このため、これらは近似値の統へ挿入したことを付記しておく。以下、図葉内に出現している土壌は次のとおりである。

(1) 黒ボク土壌

山地内の凹地・山麓平坦部に局所的に分布する火山灰質の堆積物を母材とする土壌である。1970・1974年時の適地適木調査報告書によれば、阿武隈高地の黒ボク土壌は現在よりやや広範囲に出現していたが、その後のスギ・アカマツ等の拡大造林により、また、広葉樹林の伐採や下層植生の遷移等により、黒色から淡黒色へと退色または褐色森林土壌化へ移行したものであると思われる。典型的な層厚の黒色土壌は少ない。

① 牧野統 (Makino)

大越町の牧野地区や葉山(813m)、鳴子山(764m)などの主として耕作地周辺の平坦地や凹地、山脚部に局所的に見られる黒ボク土壌で、一部に埋没土も認められる。

A層は95cmの厚さがありA₁・A₂に分かれ、かなり深い。土色は黒色

で腐植に富み、土性は壤土、硬度は軟～やや堅、構造は地表部に弱い団粒状が認められるがA₂層は特にない。石礫はみられない。なお、A層とB層の層界は判然としており、水分状態はやや乾～潤である。林地の生産力は中庸。黒色土壌のB_{1D}型に相当する。

(2) 乾性褐色森林土壌

山地の尾根、山腹凸部や風衝地に広く分布し、花崗岩等の未固結堆積物、さらに安山岩等の風化物を母材とする土壌である。

一般に土壌の層厚は薄く、特にA層は未発達で10cm以下のものが多い。

① 船引I統 (Funehiki-I)

船引町・常葉町・都路村・大越町の阿武隈高地の山腹上部や凸部に分布し、中生代の角閃石黒雲母花崗閃緑岩および淡紅色黒雲母花崗岩を母材とする土壌である。A層は3cm程度と浅く、土色は極暗褐で腐植を含む。土性は壤土で硬度は軟、構造は粒状が認められる。B層は40cm前後でB₁・B₂に分かれ、土色は褐～黄褐、腐植に乏しい。土性は壤土～砂質壤土、硬度はやや堅～堅、構造は特に発達していなく、水分はやや乾～潤である。C層は明黄褐で堅く腐植に欠き、林地の生産力は低い。土壌は褐色森林土壌のB_A・B_B・B_C型を主体とする。

② 小野I統 (Ono-I)

三春町・郡山市・葛尾村・川内村の阿武隈丘陵地と阿武隈高地の山腹上部や凸部に分布し、中性代の細粒黒雲母花崗岩・複雲母花崗岩・灰色黒雲母花崗岩および斑状黒雲母花崗岩を母材とする土壌である。A-B層は5cm程度と浅く、土色は褐色で腐植を多少含む。土性は壤土で硬度は軟、構造は粒状と一分細粒状が認められる。B層は80cm前後でB₁・B₂に分かれ、土色はにぶい黄褐、腐植に乏しい。土性は砂質壤土、硬度はやや堅～堅、構造はB₁層に粒状が認められる。水分は乾～やや乾である。林地の生産力は低い。土壌は褐色森林土壌のB_A・B_B・B_C型を主体とするが、三春町付近にはB層の黄色味が強い黄褐系褐色森林土壌のyB_A・yB_B・yB_C型も含まれている。

③ 殿上山 I 統 (Denjouzan - I)

黒石山・片曾根山・移ヶ岳・殿上山の高地と山腹上部に分布し、中生代の斑れい岩・閃緑岩を母材とする土壤である。A層は5cmと浅く土色は暗褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、構造は特に認められない。B層は80cm前後と深くB₁・B₂に分かれる。土色は褐～黄褐で腐植に乏しい。土性は壤土～埴壤土、硬度はやや堅く、構造はB₁層に塊状が認められ、水分は潤である。林地の生産力は船引 I 統、小野 I 統とほぼ同じである。土壤は褐色森林土壤のB_A・B_B・B_C型を主体としている。

④ 早稲川 I 統 (Wasegawa - I)

神保・駒ヶ鼻など大滝根川の西側に部分的に出現する土壤で、先白亜紀の頁岩・チャート・緑色岩類を母材とする土壤である。A層は8cmと浅く、土色は極暗褐で腐植に富む。土性は埴壤土で硬度は軟、乾燥しており粒状構造が認められる。B層は80cm前後と深くB₁・B₂に分かれる。土色は褐で腐植に乏しい。土性は埴壤土～埴土、硬度はやや堅く、構造はB₂層に弱いカベ状が認められ、水分はやや乾～やや潤である。林地の生産力は他の I 統よりやや良い。土壤は褐色森林土壤のB_A・B_B・B_C型を主体としている。

(3) 暗赤色土壤 (乾性型)

大越町の水晶山・滝根町の仙台平付近の山頂平坦面、山腹斜面に分布し、先白亜紀の石灰岩の風化物を母材とする土壤である。

① 大越 I 統 (Oogoe - I)

A層は5cmと浅く、土色は暗褐で腐植にやや富む。土性は壤土で硬度は軟、やや乾燥しており粒状構造が認められる。B層は60cm前後と深くB₁・B₂に分かれる。土色は褐～にぶい赤褐で腐植に乏しいもののカルシウム含有は高い傾向にある。土性は微砂質埴壤土、硬度はやや堅く、構造はB₂層に弱いカベ状が認められ、水分はやや潤である。林地の生産力は早稲川 I 統とほぼ同様である。土壤は塩基系暗赤色土壤のeDR_A・eDR_B・eDR_C型を主体としている。

(4) 適潤性褐色森林土壌

山地や丘陵地の斜面中部から山腹下部にかけて広く分布し、各種岩石の風化堆積物やその供給物を母材とする土壌である。この土壌は乾性と湿性の中間に属するが、適潤性土壌（ B_D 型）よりも、やや乾性の偏乾亜型（ $B_D(d)$ ）が主流であり、その出現範囲は広い。

① 船引Ⅱ統（Funehiki—Ⅱ）

船引Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に広く分布する。A層は30cmと深く、土色は極暗褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、構造は団粒状が認められる。B層は60cm前後と深く、 $B_1 \cdot B_2$ に分かれる。B層の土色は暗褐で腐植を含む。土性は微砂質壤土で、硬度は軟～やや堅、構造は粒状が認められる。土壌水分は潤である。林地の生産力は中庸である。褐色森林土壌の $B_D(d)$ を主体として、 B_D 型に相当する。

② 小野Ⅱ統（Ono—Ⅱ）

小野Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に広く分布する。A層は20cm程度とやや浅く、土色は暗褐～黒褐で腐植に富む。土性は壤土～砂質壤土で硬度は軟、構造は粒状が認められる。土壌水分はやや乾である。B層は20cm前後で、土色はにぶい黄褐、腐植に乏しく、土性は砂質壤土で、硬度はやや堅く、構造は特にない。水分はやや乾である。林地の生産力は三春町等の丘陵地でやや低く、阿武隈山系では中庸である。褐色森林土壌の $B_D(d) \cdot B_D$ 型を主体として、黄褐系褐色森林土壌の $yB_D(d) \cdot yB_D$ 型も含まれる。

③ 殿上山Ⅱ統（Denjouzan—Ⅱ）

殿上山Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に分布する。A層は20cm程度とやや深く、土色は黒褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、構造は団粒状～粒状が認められる。B層は60cm前後で土色は褐で腐植を多少含む。土性は壤土～埴壤土で硬度はやや堅、構造は B_1 に塊状がある。土壌水分は潤であり半角礫を含む。林地の生産力は中庸である。褐色森林土壌の $B_D(d) \cdot B_D$ 型に相当する。

④ 早稲川Ⅱ統 (Wasegawa-Ⅱ)

早稲川Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に分布する。A層は40cm程度と深く、 $A_1 \cdot A_2$ に分かれる。土色は黒褐～暗褐で腐植に富む。土性は埴壤土で硬度は軟、構造は A_1 に団粒状が、 A_2 に塊状が認められる。石礫は A_1 に小角礫が、 A_2 に角礫・半角礫を含む。B層は50cm前後に達し、土色は褐で腐植に乏しい。土性は埴壤土で、硬度はやや堅、構造は弱い塊状が認められる。土壤水分は潤である。林地の生産力は中庸よりやや良好である。褐色森林土壌の B_D を主体に $B_D(d)$ と一部に $B_D(w)$ 型が含まれる。

(5) 暗赤色土壌 (適潤型)

山地の斜面中部から山腹下部にかけて分布し、石灰岩の風化堆積物やその供給物を母材とする土壌である。この土壌は乾性と湿性の中間に属するが、適潤性土壌 (eDR_D型) が主体であり、やや乾性の偏乾亜型 (eDR_D(d)型) は少ない。

① 大越Ⅱ統 (Oogoe-Ⅱ)

大越Ⅰ統と同じ母材よりなり、同地区に分布する。A層は30cmと深く、土色は黒褐～暗褐で腐植に富む。土性は壤土で硬度は軟、土壤水分は潤で粒状構造が認められる。B層は60cmと深く $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ に分かれる。土色は暗褐～褐であるが全体的ににぶい赤褐で腐植をやや含む。また、カルシウム含有は高い。土性は微砂質埴壤土、硬度はやや堅く、構造ははっきりとは見られない。林地の生産力は中庸である。土壌は塩基系暗赤色土壌のeDR_D・eDR_D(d)型を主体としている。

(6) 湿性褐色森林土壌

山地の斜面下部から沢沿いにかけて小規模に分布し、各種岩石の供給物を母材とした土壌である。水分の供給が豊富で、しかも水の停滞がなく土壌養分も極めて多い。

この土壌は B_E 型を主体に一部 $B_D(w)$ 型が含まれ、スギを主体に生長が旺盛である。

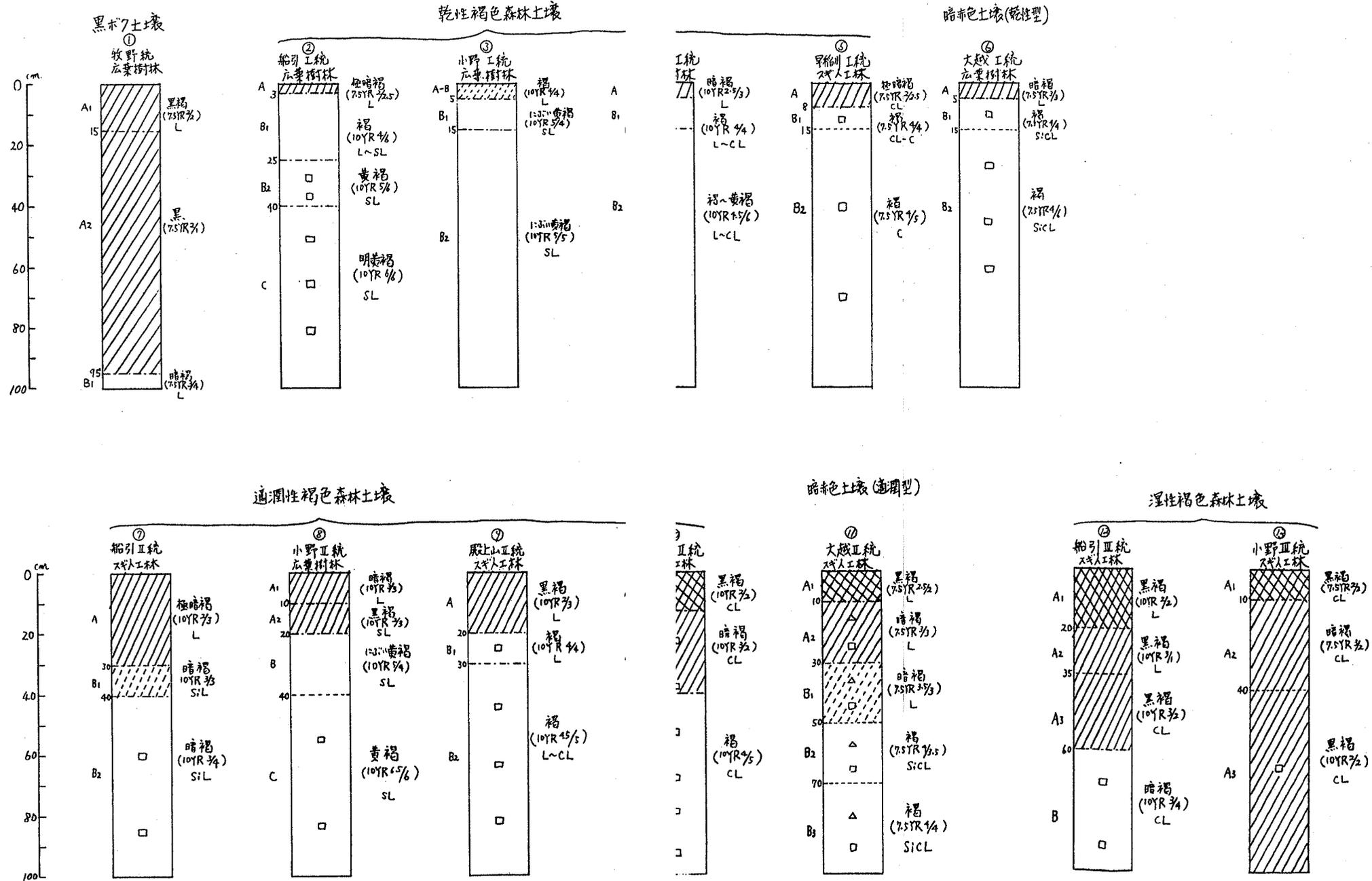
① 船引Ⅲ統 (Funehiki-Ⅲ)

船引Ⅰ統・船引Ⅱ統と同じ母材よりなり、同地区の山腹斜面の長い谷筋の崩積地に分布する。A層は60cmあり3層に分かれる。土色は黒褐ですこぶる腐植に富む。土性は壤土～埴壤土で、硬度は軟～やや堅、構造は地表部に団粒状が、A₂に塊状が認められる。B層は40cm以上あり、土色は暗褐で腐植をやや含む。土性は埴壤土で、硬度はやや堅、構造は特にみられない。土壤水分は潤である。角礫・半角礫を含む。林地の生産力は高い。褐色森林土壌のB_Eを主体に一部B_D(w)が混在する。

② 小野Ⅲ統 (Ono-Ⅲ)

小野Ⅰ統・小野Ⅱ統と同じ母材よりなり、同地区の山腹斜面の長い谷筋の崩積地に僅かに分布する。A層は3層に分かれ腐植に富む。土性は埴壤土で硬度はA₁で軟、A₃で堅となっている。構造は地表部に団粒状が、A₂に粒状～塊状がみられる。土壤水分は地表部で潤、下層部でやや湿である。林地の生産力は高い。褐色森林土壌のB_D(w)を主体に、一部B_Eが混在する。

柱状断面図 山地および丘陵地



参 考 文 献

- 添田幹男ほか：適地適木調査報告（磐城森林計画区）、福島県農地林務部、
33p、1970
- 添田幹男・今井辰雄：適地適木調査報告（郡山森林計画区、田村・石川・東
白川）、福島県農地林務部44p、1974
- 小林四郎ほか：前橋営林局土壌調査報告 第17報・郡山事業区、林野庁、
50p、1963
- 今井辰雄ほか：福島県中・浜通り地方におけるスギ林地生産力調査結果か
ら、日本林学会東北支部会誌No32、164—166p、1980

（福島県林業試験場 主任研究員 今 井 辰 雄）

IV 土地利用現況調査

1. 概 説

本図葉に含まれる地域は、福島県の東部、阿武隈山地のほぼ中央部に位置しており、移ヶ岳・片曾根山・鞍掛山の各西部山麓を結ぶ線を境に、その西部にある丘陵性の「西部地域」と、磐越東線の通る菅谷・大越両駅付近とその北にある常葉町の中心市街地を結ぶおおよそ南北方向の線で、さらに、標高の高い山地とその間にある丘陵性地域とからなる「中央地域」と阿武隈山地の最高峯である大滝根山を主体とする各山地とその間の丘陵性地域よりなるより標高の大な「東部地域」に分けられる。また、本図葉内には、JR磐越東線と国道288号と同349号が通っており、さらに県道も各方面に通じている。本地方の小中心都市である船引町・常葉町・大越町等の各中心市街地と、三春町中心市街地の東端部がある。従って、本図葉における土地利用は、これらの各地域毎地形的特徴と、主要交通路および小中心市街地との関連で、地域的各種の様相を呈していると見ることができる。

概括的に言えば、西部地域は、標高400m前後から北西方向へ漸次丘陵頂が低下し、その間に樹枝状谷が密に発達する小起伏の地域であり、侵蝕谷底にある水田と、各丘陵頂や同緩斜面の普通畑や桑畑が小塊状に分布し、全体として耕地密度が大であり、水田に比べ畑地の卓越する地域である。また、中央地域との接点付近には、各種交通路が集中し本図葉内最大の都市地域を形成している船引町の中心市街地があり、西端には三春町中心市街地の東部があり、その東郊に都市化が進行している。中央地域と東部地域は、1,000～800mの標高を有する残丘状各孤立山地とそれよりやや低い山地が断続し、その中に西部地域よりは標高がやや高く、谷密度も粗いが、やはり樹枝状の侵蝕谷とその周辺の丘陵性地形が分布し、全体としては、耕地密度は低下し、山地緩斜面にある大型牧草地を除けば、水田と畑の面積がほぼ等しいかやや水田の多い地域である。そのうち、中央地域は、少し広い谷底平野にまとまっ

た水田地帯がいくつか見られるとともに、常葉町の中心市街地や磐越東線沿線では工場も進出し、都市的土地利用がやや拡大している。

2. 各 説

(1) 耕 地

前述したように、各種の耕地は、概略的には地形的性質の相違に対応して分布しており、耕地密度は西部地域が最も密であり、水田率（耕地中水田の占める割合）は中央・東部地域が50～60%であるが、西部地域は40%台又はそれ以下で県内でも有数の畑地卓越地域となっている。また畑地の中でも桑畑がかなりあるが、特に西部地域に多く、他の畑地についてみれば、果樹園はごく一部にあるのみで、「その他の樹園地」は全く見られない。

a 水 田

水田は全地域の谷底平野に分布しているが、特に西部地域には幅狭い樹枝状の水田が、密にかつ断続的に分布している。中央地域では、常葉町中心市街地付近よりその西方の大滝根川沿岸に、同じく大滝根川支流の牧野川とそのまた支流堀越川の沿岸や、夏井川支流の上流域である菅谷付近にもやや幅広い水田地帯が見られる。東部地域にも樹枝状谷に対応する水田が見られるが、標高が高くなり、冷夏の年には著しく減収し、特に阿武隈山地内の最高位置（標高750m前後）にある大越町早稲川の南部の水田は、その一部が現在は耕作放棄されている。

b 普通畑（牧草地も含む）

各地の丘陵頂や丘陵斜面、小河岸段丘面等に小塊の普通畑が分布するが、近年は丘陵地を造成し、やや大型のものもできています。作物は葉タバコが全般的に多く、船引・常葉・大越・滝根の各町は県内でも作付面積が多く、特に船引町は町村単位で全国一～二位の葉タバコ生産地となっている。また各地で各種の野菜類も作付されている。一方山地の緩傾斜面には大型の牧草地が造成されているが、一部では荒地化の傾向を示す所もある。

c 桑畑等

一般に丘陵頂や丘陵斜面には桑畑がかなり分布しているが、特に西部地域に多く、一部は普通畑と同じく丘陵地を造成してやや大型化したものもある。ただ近年は養蚕従事者の減少や高齢化及び外国産輸入品との競争に伴って、桑畑は減少気味であり、また桑畑として存在しているが、剪定せず、桑の枝の伸び放題のものもかなり見られる。果樹園はごく一部に分布するのみである。

(2) 森林

東部・中央両地域の山地全般と、全地域中の丘陵頂や丘陵斜面に、森林は分布しており、スギ・マツ等の針葉樹林と、ナラ・クヌギ等の広葉樹林が各地に混在しているが、全般的には東部地域に針葉樹林が多い。国有林は標高の高い東部地域の山地に多く、また、一部に保安林もある。

(3) 市街地・集落等

小市街地は、主要交通路の沿線である船引・常葉・大越各町の中心部および三春町中心市街地東部にあり、近年住宅地化・工業用地化が進み、上記各地域の周辺部に拡大している。各地に小塊状の集落が耕地の分布に対応して散在しているが、主要道路沿線にはややまとまった線状の集落がある。

(4) その他

大滝根山西部の石灰岩台地^{せんたいひら}仙台平には石灰岩の、移ヶ岳・黒石山等には斑禰岩の採石場がある。常葉町の殿上山には「こどもの国ムシムシランド」の遊園地がある。

図葉の南東部には磐越自動車道が建設中であり、船引町や三春町では中心市街地を迂回する国道のバイパスが造られている。

また、図葉の西端部では三春ダムの湛水予定地があり、集落・耕地等は移転したが、現況図には荒地として表現した。

なお、五十人山・大滝根山・高柴山が「阿武隈高原中部県立自然公園」となっている。

◎お願い

この土地分類基本調査成果を複写又は引用して利用する場合は「土地分類基本調査：常葉から複写（又は引用）」と御記入くださるようお願いいたします。

平成6年度 調 査
平成7年度 印刷発行

土地分類基本調査

常 葉

編集発行 福島県農林水産部農地計画課
福島市杉妻町2番16号
電話 (0245) 21-7406
印 刷 株式会社 渡辺印刷所
福島市春日町1-13